靖国神社みたま祭

7月13・14・14・15・16日

参道の両側には約8,800個の大型提灯が、神門の内側には約16,000個の小型提灯が並んでいる。

会報 特攻

平成9年8月

第32号

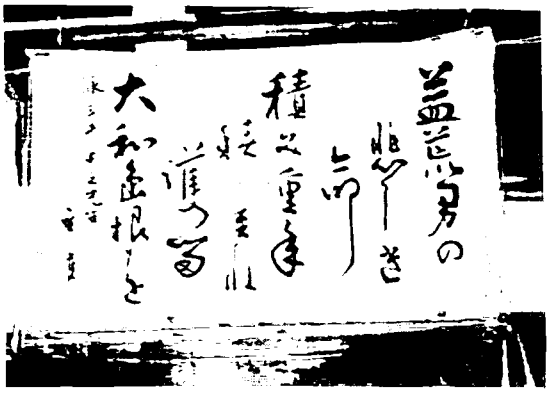
〒105 東京都港区虎ノ門
3-6-8 第6森ビル
財団法人 特攻隊
戦没者慰霊平和祈念協会
電話 03(3432)1090

編集人 田中賢一
発行人 木村元正

「やすくに」社報より

…この光の祭典「みたままつり」には、例年各界名士揮毫の懸雪洞のほか、靖國講、御遺族、戦友を始め、数多くの崇敬者の方々から献納いただいた万灯の「みあかし」を社頭に掲揚し、更にはみこし振りを始めとして盆踊り大会、相撲大会、各種奉納芸能大会を催して、祭りを一段と賑々しく盛り上げております。

懸雪洞はおよそ四百基もあったろうか、奉納者の精神が籠っていて、琴線に触れるものがあるが、今回は我が会員金文男氏の左記の短歌を書いたものに感銘を覚えた。



つみ重ねまもるやまとしまねを
ますらをが悲しきいのちつみ重ね

この歌は三井甲之（明治16年生れ、昭和28年七十一才で逝去）という歌人の作で、昭和2年駆逐艦蕨が演習中の事故で沈没したとき、「蕨機関長故福田氏をしぬびまつる」と題した九首連作の一つである。そのように古いものであるが、今次大戦中特攻隊を偲ぶ歌として特に愛唱された。次に掲載してある「思いで草」と題する記事の5頁にある大石少尉の遺書にも、この歌の一部が引用されている。まことに御祭神に奉げるにふさわしい歌である。

目次

靖国神社みたま祭……2
ある特攻隊員の母の手記……7
第二御楯隊……11
少年特攻隊員に感銘した少年達……18
反日偏史教科書の是正について……22
昭和殉難者碑前祭「聖……24
英霊は嘆く「あ、残さなり」と……27
陸軍航空碑々前祭……28
各地の慰霊祭　万世6　鹿屋13
義列17　都城25　沖縄学徒26
知覧26　特攻28
B29体当り生還坂本曹長の大捷……27
軍事史日録……28

ある特攻隊員の母の手記

「思いで草」

解説　伊藤直之

靖國神社の参道に掲げた私の絵が御縁で、ある婦人と面識を得て、その人の親戚にあたる故大石トクさんという方が、昭和59年九十六才のとき上梓した「思いで草」と題する小冊子のコピーをもらった。この方の三男（上の二児は夭折したので実質的には長男）の大石政則は東京帝国大学法学部二年在学中に、学徒動員で海軍に入り第14期飛行予備学生となり任官。八幡神忠隊に属し昭和20年4月28日、97艦攻に搭乗し串良を発進し、那覇近海の敵艦船に突入散華した。

この老母の手記は惻々として胸打つものがある。全文極めて感慨深いが、紙面の都合で一部省略して転載させてもらう。

（前文略）それにつけましても想い出されますのが二児の亡くなりましたあと、長男として育ち、青春の真っ盛りに戦死しました息子、政則のことでございます。

主人は病死でございましたから若死とは申せ、やはり天の定めた寿命と思っております。二児は死と生の分別もつかぬ子供のときに亡くなりましたことを思いますと、政則だけが生きることの有難さを存分に知りながら国を護るためにとその生命を若くして燃やし盡してしまったのでございます。

そのとき、あの子は声にこそ出して申しませんでしたが、「お母さん、僕がまだ生きられる分まで生きるんですよ、永生きをするんですよ」と、心のなかで私に話しかけていたのだと私は今日でも信じております。

「また、大石のおばあちゃんの息子の話がはじまった」とお思いでございましょうが、老いの繰り言とお許しの上、私をその想い出のなかにひたらせていただけましたら、この上ない幸いでございます。

春酣なわの昭和二十年四月二十八日に特別攻撃隊員として散華した息子も天国でほほ笑んで聞いていて呉れるものと思います。

息子、大石政則が出征いたしましたのは、さきの大戦も終わりに近い昭和十八年のことでございました。

当時、政則は東京帝国大学法学部の二年に在学中でした。

その二年前から始まりました日本が世界の他の国々を相手にした戦争は日に日に不利となってゆく様子は銃後の私たちにもよく分かりました。

戦局が不利になりましたためでございましょう、法文科系の大学、高等学校、専門学校在学学生の「徴兵猶予停止」ということが突然、発表されました。

昭和十八年九月のことでございました。

政則は急ぎ帰省して徴兵検査を受けましたが、中学生時代から剣道や陸上競技で鍛えて来た体は忽ち合格の判定が下されました。

そして政則は「お母さん、僕は海軍に入るよ、飛行機搭乗員になるんだ」と申しました。

私は一瞬おどろきました。

軍艦が沈めば艦長さんも水兵さんも皆な一緒に海底に消えてしまうと思われる海軍になぜ、それにもまして、一番危険であるとされる飛行機搭乗員をなぜ志願するのか、私はそのとき本能的に子の生命を思う母になっておりました。

わが子を戦場に送り出す多くのお母さん達と私も同じ気持ちだったのです。

私は返事も出来ずに息子の顔を見詰めておりました。

息子はキッと唇を固く結んで生来、色白であったその顔が紅潮しておりました。

何かの決意を示しているようなその表情を見て「ああ、政則ちゃん、やっぱり海軍ね」私はひとりで深く肯きました。

政則の少年時代は日本中の男の子さんがそうであったように、やはり軍国少年でした。それにもまして政則は人一倍の海軍好きでした。

それは政則が福岡県の嘉穂中学から転校いたしました大分県の竹田中学時代から無言のうちに育っていた憧れがそのようにさせたようでございます。

ご存知でございましょうが竹田町には軍神と言われた広瀬中佐をお祀りした広瀬神社がございます。私どもはその近くに住んでおりました。

息子はその町にある竹田中学校に二年生から四年生までの間、在学しておりましたが、三度お世話になりました中学校のなかでは一番長い期間在学していたわけでございます。

青年前期の最も多感な時期をその静かな町で過ごしていたのでございますが、その竹田中学校では毎月、神社の祭日には全校生徒が揃って参拝していたのでございます。

このようなことがございまして政則は一直線に海軍を、なかでも航空隊員となることを無言のうちに目指しておりました。

或る日、「佐世保海兵団ニ入営セヨ」との通知がまいりました。

その一枚のハガキがその後、僅か一年4ヵ月、満二十二歳九ヵ月で息子、政則が国を護る防人として散華する運命の便りとなりましょうとは。

政則は佐世保海兵団で五十日ほど二等水兵として過ごしましたが、その間に海軍予備学生の試験に合格、念願が叶って飛行機乗りの適性検査にも合格して昭和十九年二月一日、土浦海軍航空隊におきまして第十四期海軍飛行専修予備学生を命ぜられました。

土浦での基礎教育を終わって息子は出水航空隊に移りましたが、いよいよ憧れの操縦桿を握れるようになりましたこの隊での生活が短い海軍生活で一番楽しかったようです。

同じ九州でございましたから私ども夫婦、妹や弟、それに親戚の者も度々、面会に出かけてはクラブで楽しい語らいのひとときを過ごしました。

士官服姿の政則はすっかり逞しい体つきになって終始にこにこ笑みをたたえて飛行機の話や教官の話、私どもが面会に参れぬ日曜日には士官の決まりとして二等車に乗って遊びに出かけるときの話などを楽しそうに語っておりました。

昔の列車は二等車、三等車という風になっておりましたが、今日のグリーン車にあたる車両に納った士官さんがどんな遊びをするのかと訊ねますと先ず食べること、一度に、おしるこ、すし、親子丼、オムレツ、果物と聞いて私たちは呆れかえって大笑いをしました。

とにかく出水航空隊での四ヵ月の生活が息子にとりましては短い生涯のなかでも最も楽しかったひとときであったろうと私は今でも思っております。

その年の夏の終りに政則は宇佐航空隊に移りました。

そして、初冬の頃、私は神風特別攻撃隊の出撃を初めて知りました。

爆弾を抱えて飛行機もろとも敵艦に体当りをするのだと聞きまして、そうまでしなくては敵に勝てないのだろうかと思いましたが、まさか息子までがそのような体当り攻撃をする隊員になろうとは夢にも思っておりませんでした。

私達家族は宇佐航空隊にも面会に参りましたが、晴れて少尉に任官しました息子は益々、逞しい体つきになり、艦上攻撃機という飛行機の操縦にあたっているのだと誇らし気に語っておりました。

二十年四月の或る日、ある方から「至急、大石少尉に面会に行かれるように」と内密の連絡をいただきまして私ども夫婦は何事であろうかとやっと手に入れた切符で列車に乗り、宇佐航空隊に向いました。

「まさか、政則が特別攻撃隊で出撃するのではないでしょうね」

満員の列車の中で主人の耳許で私が申しますと、

「几帳面な政則のことだから親に黙って行ってしまう筈はない」

主人は不安を隠すように言いました。

列車の走り方さえもどかしく感じられる思いでようやく航空隊に駆けつけました。

二十年四月十七日のことでございます。

「大石少尉に面会をお願いいたします」

隊門でそう申し出ますと、

「大石少尉は昨日出撃されました。もうこの世には居られません—」

受付けの兵隊さんが静かに言われました。

電気に撃たれたようにその言葉が私の体を突き抜け、体中の血が地のなかに吸いこまれていくようでしたが、

「士官の母としてまさかの時にも涙を見せてはいけません」と申しておりました政則の言葉をしっかりと噛みしめ、私は葉隠れ武士の母らしく涙をこらえておりました。

せめて息子のお友達にお会いして出撃の様子をお聞かせいただきたいとお願いしまして、五、六名の同期の戦友方と昼食を共にしながら皆様から政則の想い出をあれこれと際限がないほどお聞かせねがい、政則が目の前にいるようにしっかりとその姿を想いうかべることが出来ました。

その日の午後も特攻隊の出撃がありますとのことで、特攻隊の遺族として是非それを見送って息子さんの出撃の姿と思って下さいとの温かいお許しを隊からいただきまして、私ども夫婦はしっかりと自分の目で特攻隊出撃の様子を見届けることが出来ました。

出撃される勇士達は皆様、桜の小枝を襟に飾って水盃を交わされておられましたが、

「先に征くから、あとは頼むぞ」

「必中を願う、あとから征くからな」

と、見送られる戦友、見送る戦友は交々、明るい笑みをたたえながら語り合っておられました。

やがて、一番機を先頭に次々と滑走

路を離れた特攻機は飛行場の上で編隊を組み大きくお別れの翼を振って南の方に向いました。

これが政則の姿だったのだと私はいつまでも涙も拭わずに機影に手を合わせておりました。私どもは政則が遺した鞄をしっかり抱いてその地をあとにしました。

それから十日後のことでございます。

「マサノリオル、クシラニイケ」謎のような電報が思い当りのない方―あとで、このお方は政則の戦友の親御さんと分かりましたが―から届きました。

まさか政則がまだこの世に居るとは、と半信半疑の気持で主人と私は宇佐より遙か南の鹿児島県串良に急ぎ参りました。

串良航空隊は一望の藷畑のなかにあって宇佐航空隊のような立派な建物は一つとしてありません。

ようやく見つけた隊門で、またも「大石少尉は昨日―」の言葉を聞くのではないかとの不安にかられながら恐る恐る政則の名前を申しますと、

「大石少尉はただいま作業中です、暫らくお待ち下さい」

との返事が返ってまいりました。

〝政則が生きていた、まだこの世にいる〟

私の顔に一度に血が上がってまいりましたが、まだ半信半疑の夢のような気持ちでございました。

神佛の御加護があって私は吾が子に再び会うことが出来ました。

その晩は隊の近くの一心館という旅館に三人で泊り、夜の更けるのも忘れて語り合いました。

宇佐を飛びたった政則の飛行機は潤滑油が洩れて風防にかかり前方が見えなくなったので一旦は引き返しかけたが、責任ある一番機であることから再び進路を南に向けたもののどうしてもそれ以上の前進が出来ず戻ったとのことでございました。

命が惜しくて引き返したと思われるのが辛いと政則は唇を噛んで申しました。

私は立派に整備された飛行機がそうした故障を起こしたのはお母さんがあなたに会いたいと思う一念が天に通じて引き戻して下さったのです、ご奉公はいつでも出来るのですから決して死に急ぐことはありませんと申しました。

その夜と翌日の夜、

「久しぶりだからお母さんの懐ろで寝るよ」と申す息子の体をしっかり抱いて私達親子三人は「川」の字になって眠りました。ようやく遣い遣いをし出した頃と同じ政則の温もりが私の体中に伝わってまいりました。

いま思いますと、こうして最後にわが子を二晩も抱きしめて寝ることが出来ました私は他の特攻隊員のお母さま方には申し訳ないほど幸わせであったわけでございます。

幸い、政則はまだ直ぐに出撃する様子ではありませんでした。

朝になると隊に向い、夕方は旅館に戻って来るという、まるで政則が学校に通っていた頃と同じように親子が朝夕に顔を合わせるという日が二日続きました。

丁度その折、娘、禎子の夫、竹内大尉が朝鮮光州航空隊から諫早航空隊に転勤になり、夫妻で私の家に立寄っておりましたので、

「政則ちゃん、あなたの居場所がわかったのでちょっと竹内夫妻に会って来て、直ぐに戻りますからね」と、

出撃の気配を感じなかった私はうっかり申しました。

政則はそうしなさいと言うように黙って深く肯きました。

私は後に知ったのでございますが、竹内大尉は特攻隊隊長を命ぜられておりました。

同じ海軍軍人であった政則は早々とこうなることを予想していたのでございましょうか、自分の妹に軍人の妻としての万一の時の心がまえをその遺書となりました日記にも書き記してございました。

妹思いの政則は娘が私と久々の対面をどれほどか楽しみにしているかを心の底で思っていたのでございます。

それが「お母さん、行ってらっしゃい」との無言の返事だったのです。

そのとき、政則は自分が〝明日、出撃〟と知っていた筈ですが、私には一言もそのことを申しませんでした。

おそらく、自分と両親との別れの悲しさよりも自分の妹が親に会う歓びの方を考えていたのでございましょう。

その朝、私達は前の日と同じように旅館の玄関へ隊に向かう政則を見送りに出ました。

外は霧雨でした。

「お母さん、雨が降っているから此所までいいよ」

道まで出ようとする私達を政則は手で押えるようにして言いました。

「お母さんはまた直ぐここに戻って来ますからね」

これが私が息子にかけた最後の言葉になりました。

そのとき、「お母さん、明日は出撃です」と一言洩らして呉れれば私は何事を措いてもそれを見送るまでいたの

でございますが、息子は私の嘆き悲しむことを心配し、また、妹を飲ばせて上げたいとだけ考えていたのでございましょう。

旅館の前の道を真っ直ぐに歩いた政則は曲り角に着いたとき、初めて私達の方を振り返り、煙るような雨のなかで長い長い挙手の礼をいたしました。

軍服の肩に雨が粒になって光っているのが私の目に映りました。

これが私達が息子、政則を見た最後の姿でした。

「神風特別攻撃隊八幡神忠隊、昭和二十年四月二十八日、沖縄周辺ノ敵艦船群ニ体当リ攻撃ヲ決行ス」

息子、大石政則海軍大尉の戦死は海軍布告にこのように記されております。

今日の日本は世界中の国々が目を見張るほど栄えております。その日本のなかで政則と同期の生き残られた方々は立派な社会的地位を得られて国の繁栄を支えて下さいますが、ことあるごとに「戦死した僕等の仲間が叱咤激励して僕達を日本の復興にふるい立たせたのである」と申して下さるのを聞き、私は息子の戦死は決して無駄ではなかったのだと思い直しております。

生き残られた皆様は私ども遺族に温かいお心遣いをなさって下さり、毎年、懇ろな慰霊祭を行って下さることに英霊達はどれほどか喜んでいることかと遺族として感謝申しあげております。その方々も私が九十六歳を迎えますと同時にひとり残らず還暦を迎えられました。「益々お達者で国のためにお働らき下さい、国のために散って逝きました息子をはじめ、沢山の戦死された方々がそれを願っておるのです。」と、この老いの口から申し上げ、おねがいをいたします。

私もまだまだ永生きをして折あるごとに息子の想い出話をつづけとうございます。

皆様、私の長い想い出ばなしにおつきあい下さいまして、ほんとうに有難うございました。

はろばろと　来し方顧ればこたみ　天がけし
白マフラーの　子の笑顔顕つ

九十六歳の誕生日を迎えて
大石トク　平成二年二月　佳日

（遺書）

父上母上

男子最後の壮途に上るに際し遙かに皆様に訣別の言葉を述べさせて頂きます。明二十八日の午後四時頃私は廿四才を最後として散ります。決してお嘆き下さいますな。出撃前夜の私の心は平静沈着少しも普段のそれと変わるところありません。むしろ去る十二日の第二次特攻にて引返した不面目と責任を今こそ果しうるという雄心に充ち溢れてゐます。

只今最後の鬚剃りを鯉田少尉にやつて貰ひ終つたので又続けます。

三五三号（中間席小野寺少尉、電信員大童二飛曹）で宇佐の区隊長機としてゆきますが使用機は待望の三号艦攻（一度も乗りたることなけれども）なので本当にそれ丈でも心のはづむのを覚えます。

一二三〇発進（午前空襲あれば一五三〇）沖縄周辺の敵輸送船に対して痛快なる突入を決行します。仮令途中にて墜さることあるも戦果はなくとも二十代の若武者が次から次へと特攻攻撃を連続し、まずらおの命をつみかさねつみかさねして大和島根を守りぬくことが出来れば幸ではありませんか。

ここでしばし回想させていただきます。一心館での面会が本当に最後の面会でしたね。御両親様の御顔を拝し又竹内夫妻の消息、家の様子などうかがうことが出来又「心残りだ」とされていた「荒波越えて」を一読するを得私の心は少しの心残りもありません。満足のみです。本当に出撃前にこの機会を与えられた運命の神の御加護を畏む次第です。〇の日空襲で防空壕に入ったことやカシワを喰いすぎたことなど——御蔭で風邪をひき胃をこわしましたがね。

廿有四年並々ならぬ御苦労を以て育てられた御恩を有難くいただきながら最大の親孝行をつくすべくゆきます。少しでも膝下にかへつて御面倒を見万分の一でも報じたく思ひましたがそれは日本の戦局が許しませんでした。若い者は皆々皇国の捨石たるべく運命ずけられてゐます。今になつてこの運命の尊さを泌々味ひます。

私がなくなつても政隆の偉大なるあり又竹内大尉あり（編者註、妹の夫）私一家のみにても後に才々たるものあり後に心をやるなど毛頭ありません。政隆は私に代り私に優る者将来は期して待つものあります。どうか政隆に全幅の愛情と期待をかけられてこれからをお送り下さい。宇佐発進の折の決意を示して

待ちわびし身に甲斐ありて大君の御楯とび立つ今日のうれしさ

国体擁護の日本民族総力決戦の真只中神風特別攻撃隊の一員として敢然沖縄の海に予は死す。身は敵艦諸共四散し

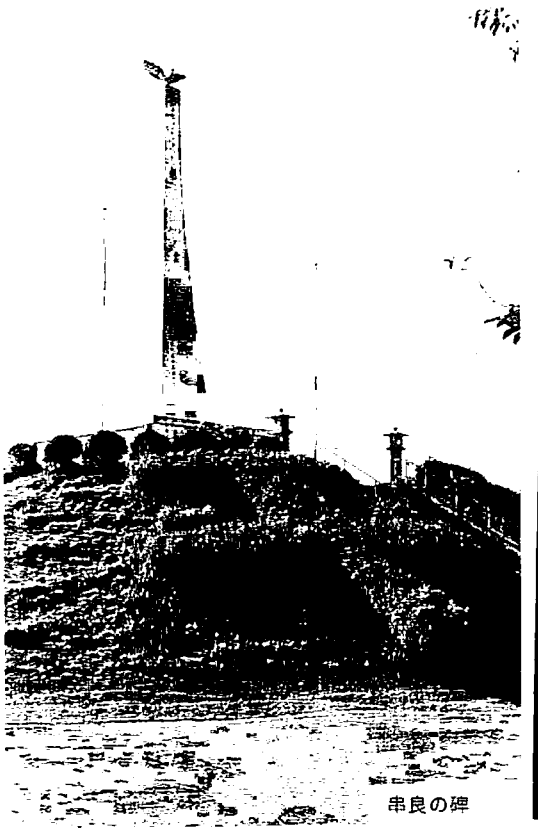
去るとも魂魄は国体擁護聖戦に永久に生き抜き以て日本の四海に神風を吹き起さなん。神州興隆四夷撃伏（吉田松蔭）の悲願を抱き戦死に至〇する廿四の人生を終る。

〇濤を挽回し攻勢移転の機の一日も速かならんことを切に切に懇望す。

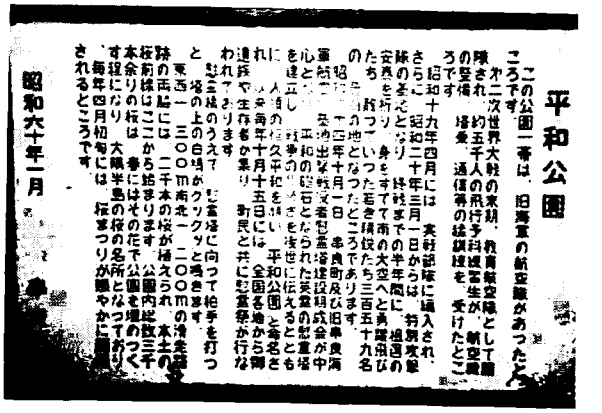
天皇陛下萬歳

二〇・四・二七・二〇〇〇時

この遺書の手書き（鉛筆らしい）のコピーが冊子の末尾に綴られているがいつどこで受取ったのか、その際の情景などは載っていない。



串良の碑



平和公園

この公園一帯は、旧海軍の航空隊があったところです。かつて第二次世界大戦の末期、教育航空隊として開隊され、約五千人の飛行予科練習生が、航空機の整備、通信等の練習を、受けたところです。

昭和十九年四月には、実戦部隊に編入され、さらに昭和二十年三月一日からは、特別攻撃隊の基地となり、終戦までの半年間に、祖国の安泰を祈り、身をすて南の大空へと、勇躍羽ばたいた若き精鋭たち三百五十九名の方々の出撃の地となったところであります。

昭和二十年十月一日、串良町及旧串良海軍航空隊出撃戦没者慰霊塔建設期成会が中心となって、平和の礎石となられた英霊の慰霊塔を建立し、戦争の悲惨さを後世に伝えるとともに、平和公園と命名され、毎年十月十五日には、全国各地から御遺族や生存者が集り、新旧戦友と共に慰霊祭が行なわれております。

慰霊塔に向って柏手を打つと、塔の上の鳩がクックックと鳴きます。

東西一二〇〇m南北一二〇〇mの清楚な敷地には、二千本の桜が植えられ、本土の桜前線はここから始まります。公園内総数三千本余りの桜は、春には、そのたくさんの花びらが、大隅半島の桜の名所となります。

毎年四月初旬には、桜まつりが賑やかに開かれるところです。

昭和六十年一月

万世特攻慰霊祭

万世特攻慰霊祭は、4月13日約250人が参列して12時30分開会した。

全国各地から多数の御遺族、戦友が参加され、加世田市側からは川野信男市長を始め関係の方々のご参列の裡、厳粛にとり行われた。

遺族代表は、第73振武隊として4月6日万世より出撃、突入された木原愛夫伍長の令兄、千々和琢磨氏が追悼の言葉を献ぜられ、訥々と碑に語り掛けられたことが心にしみた。陸上自衛隊音楽隊の〝国の鎮〟の調べの中、参加者全員が粛々と、それぞれの感懐を胸に秘めての献花。

慰霊飛行に海上自衛隊鹿屋基地からP3－C一機が飛来した。旧隊員が碑に御神酒を注ぎ、全員で加藤隼戦闘隊歌を合唱、やがて国旗が降ろされ、閉式の辞が述べられた。

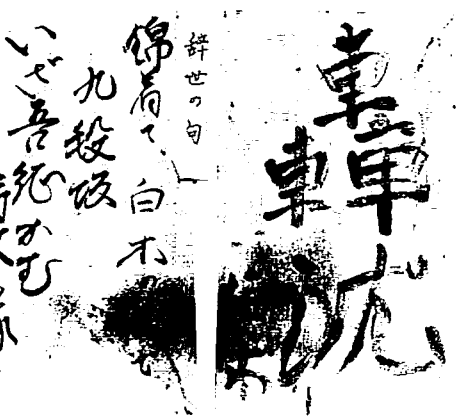
この慰霊祭に参列の機を得て思いますことは、地元のお陰、ということであります。加世田市発行の観光ガイド〝おじゃんせ　かせだ〟には、慰霊碑と平和祈念館の写真が掲載され一陸軍最後の特攻基地万世飛行場跡に建てられ、零式水上偵察機や、死を間近に控えた隊員たちの最後のメッセージ、遺影、遺品等を展示」と説明してある。加世田市、地元の皆様に対し、有縁の者として誠に感謝に堪えない。

そして又、慰霊碑（よろずよに）の建立に、平和祈念館の開館に、日夜奔走された苗村七郎氏に深い敬意を覚えます。一人の力は偉大なり、と。

かけがえの無い命を、国の為に捧げた若人達、真正直な、純粋さ、そして勇気。

山河あるところ伝統あり、碑前の誓いは永久に伝えねばならない。深川記

血書



硫黄島作戦における第二御楯隊

マリアナのB—29基地に対する経空攻撃のシリーズで、前回は第一御楯隊のことに話が及んだ。防衛研究所戦史部保管の資料を転記したのであるが、戦史部には第二御楯隊の資料もあったので、これはサイパン攻撃ではないが、転記する。

第一御楯隊と第二御楯隊両方の碑が硫黄島にあるので、その碑を主題としこの会報16号（平成5年3月）に公刊戦史を引用して紹介した。今回転載するのは「懐旧」と題する第六〇一航空隊（杉山部隊）の部隊史の該当部分である。この部隊史は当時の司令杉山利一中佐（故人）が、昭和30年に作成したものである。文中私とあるのは杉山司令のことである。

第三章　硫黄島特攻作戦

一、情況判断

米国の機動艦隊は十六、十七日の二日間関東地方に来襲して主として飛行場を攻撃して硫黄島に集中し得る日本の飛行機を制圧した。

B29は昭和十九年十一月以来大編隊をもって大都市（主として夜間）軍事施設（主として昼間）の攻撃を実施しているが戦闘機を伴わない爆撃機だけの行動は相当の被害があり、遠距離戦闘機P—51を使用しても「サイパン」を基地とする場合は遠過ぎてP—51の行動圏は関東南半に限定されるため掩護の徹底を欠くうらみがある。なおB—29と雖も日本戦闘機の邀撃に遭い高速を使用したり、燃料「タンク」に被弾し燃料を失った時は「サイパン」まで帰ることは困難となるので東京——「サイパン」間に中継飛行場を是非とも欲しいところである。

戦略的にみてもかかる状況にあるとき、はからずも十五日飛行機の偵察報告は敵の大部隊が硫黄島の南方二百浬を北上していることを報じている。

以上を総合して米国は硫黄島を攻略する意図のあることが十分察知された。

二、作戦準備

いよいよ敵攻略部隊は硫黄島攻略作戦を実施すると判断したので、……戦略、戦術からいっても、これは当然のことだと知っていながらサイパン失陥以来、B—29に本土の軍需生産設備は叩かれ、前線には飛行機はないし、この米国の意図に対してもなすところなく、いわば手遅れのオツ取り刀、あるだけの持駒で立向わねばならぬことになり、かねて寺岡長官より示された特攻作戦に取かかった。

(イ)　先づ十四日には作戦準備下令と同時に南関東の第三航空艦隊配属の各航空隊より彗星爆撃機及び零式戦闘機の搭乗員と飛行機を出来るだけ多く六〇一空に配置変へをしてもらった。この人員機材は十六七両日の機動艦隊来襲の際失ったが出来るだけ多数機が特攻作戦に参加出来るように考慮した。

(ロ)　十七日の午後第三航空艦隊参謀から特攻隊員を決定して至急名簿を提出するよう催促して来たがこの時初めて特攻攻撃の挙を全隊員に発表して志願者を募集した。そして志願者は翌十八日の午前中に飛行長武田少佐に申出るようにした。これと同時に十七日午後幹部を集めて研究会を開いた。

(ハ)　十八日正午武田少佐より搭乗員全部が特攻隊を志願、隊員名簿、即特攻隊員名簿であると報告して来た。

三、作戦計画

私の隊としては彗星爆撃機が攻撃の主力である。

彗星爆撃機ならば天候良好で、高々度接敵が出来る場合には戦闘機の掩護なしに敵の戦闘機の阻止圏を突破して十分効果を発揮出来るが雲が低く高々度接敵が出来ない場合は戦闘機の掩護なしでは敵戦闘機の好飼となるばかりである。これは彗星爆撃機が水平速力は戦闘機に劣っているが、一たび急降下飛行に移った場合、彗星爆撃機の方が戦闘機より遙に速力を出せるからであって、彗星爆撃機の搭乗員の極め手は高々度接敵にあるのだ。

しかるに二月は日本附近は一年中で天気の不良な時期で必ずこの極め手が便えるとはいえない。戦闘機の掩護を必要とすることになるが関東地方より硫黄島までの距離の関係から、戦闘機群をもって目標上空の制空権を確保したのち、彗星爆撃機を突入させることは不可能なので、攻撃時刻等も考慮しなくてはならなくなる。

(イ)　編制については戦爆連合の小部隊編制として分散進撃して一部が敵戦闘機の犠牲となっても他が成功することをねらった。この場合掩護戦闘機を特攻々撃隊とするか、否かについては異論があり、前例としても特攻隊としたことなくまた後になっても私の隊以外には特攻隊としたことはなかった。六〇一空は元々母艦部隊であったので戦闘機も爆撃機もみな仲よく同じ釜の飯を食って来たと考えている。戦闘機隊の者から喜んで爆撃隊の推進掩護には自らを犠牲

にすると申し出たのであった。これこそ実に戦、爆連合した協同作戦の妙というべきであり、母艦部隊の伝統なのだ。

(ロ) 攻撃時刻は日没前後で敵戦闘機が母艦に着陸した直後を選ぶのが最適であるが、距離の関係上難しいので爆撃機隊は午後四時乃至五時の間に強襲することにした。

雷撃機隊は元山艦上攻撃機の性能上、日没後三十分頃に選んだ。暗くて攻撃上は不利でも敵戦闘機の行動しない時機を目途として午後五時四十五分乃至午後六時と決定した。

（二十日硫黄島の日没は午後五時卅三分である。）

(ハ) 次に彗星爆撃機は二人乗りであり、天山艦上攻撃機は三人乗りである。特攻攻撃に際しては、偵察員と電信員とは任務が軽いとされて一般には指揮官機以外の飛行機には乗せることなく、操縦者だけで実施した例が多い。しかし六〇一空だけではこのようなことを偵察員と電信員が承知しなかった。「日頃死なばもろともと訓練を積んで来たわれわれだ。操縦者だけは殺されない」とけんか腰で主張して譲らぬ。これには全く閉口させられたが、何という戦友愛であろうか。私はこの激しい抗議を聞きながら目頭が熱くなった。

(ニ) 攻撃進路は航空母艦を含む部隊が

① 硫黄島の北西約八〇浬に一群（航空母艦三隻）

② 硫黄島の南西約一〇〇浬に二群

ある点から見て米国は本土、沖縄及び台湾方面からのわが航空攻撃に備えているもののようである。そこでこの裏をかき、父島の東方を迂回して硫黄島の東方乃至南東方より近づいて攻撃することに決定した。

（この作戦は見事に奏効して奇襲に成功したのだった。）

なお彩雲偵察機をもって父島西方約一二〇浬附近に行動電探紙（錫薄）をバラまいて、敵の戦闘機を硫黄島北西方に牽制したことも役立った。

(ホ) 攻撃目標としては、戦術的見地から輸送船団の入泊直後、未だ海兵隊を揚陸せぬ前に輸送船を攻撃するのが、最適であるが天候の都合その他で海兵隊の揚陸後になることも考えて航空母艦その他大型艦船の攻撃も適宜行うこととした。搭乗員の感情からすれば航空母艦を最重視し、輸送船のごときは余り好まぬところなのでこの点十分考慮する必要があった。

(ヘ) 中継着陸基地の準備

香取基地と硫黄島との間は直距離七五〇浬であり。作戦行動をすると約八三〇浬となる。この距離は使用飛行機の限度であるから八丈島を中継基地として燃料補給することとし友隊一三一空飛行長藤村中佐外整備員十四名を八丈島基地に派遣した。

四、特攻隊員の決定

十八日敵の空襲なく敵機動部隊は南下して味方攻撃飛行機を邀撃する配備についている。これは硫黄島の攻略開始が迫ったことを示していると考えたので特攻隊員の決定をした。艦隊司令部からは早く特攻隊員を決定するよう催促して来ていたが自分はわざとこれを遅らせていたのであった。

特攻作戦については、私は長期間実施すべきものではないと考えていた。

人間である以上死を決して永く生きていることは苦痛であるはずだ。生命への愛着は本能であるからである。

最も苦戦の場合にのみこれが打開策として止むを得ず行うべきであって、その場合でも特攻隊員と決定したら早く実施すべきであると考えたので二月十四日に長官より特攻隊の発令があったが人選は特攻々撃実施直前まで決定せずにいた。しかしいよいよ時期は迫った。

特攻隊参加志願者のうちで最も効果を得られることを主眼に選任して十八日夕刻その氏名を発表した。故郷に家族のあるものは出来るだけ除外した。選に漏れた者が「是非、自分を参加させて呉れ」と申し出たが戦局の推移は必ず総員特攻隊に参加の機会があるから時期を待つ様諭していると血書まで持って次から次へと申出て来る。夜中になってようよう済んだと思って床に入ると高崎中尉が来て頑強に主張して説得に困った。

さて次に困ったのが指揮官だった。

「指揮官には自分がなる」と艦上攻撃機隊の隊長肥田真幸大尉（海兵67期）と、爆撃機隊の隊長村川弘大尉（海兵70期）が互に譲らず申出て来た。

肥田隊長の主張は「先任隊長である」というのだ。村川隊長は「自分は使用機の多い爆撃機隊の隊長だから当然である」と主張する。最も攻撃効果を挙げ得べき手段として私は村川隊長の説に同意であった。そこで肥田隊長には涙をのんで次の機会を待つことにしてもらった。

二月十九日午前十時寺岡第三航空艦隊司令長官が臨場して香取基地で特攻隊の命名式が挙行され

「神風特別攻撃隊、第二御楯隊」

と命名された。

この日敵は未明より大型輸送船百隻、小型艦艇約百五十隻からなる攻略部隊をもって硫黄島の攻略を開始したので翌二十日決行と定められた。

夕食時、寺岡長官を交えて特攻隊員総員士官室に参集し、ささやかな宴を張り、終って特攻隊員は身の廻りを整理して翌朝を待つことにした。

五、特攻隊出撃

二月二十日いよいよ特攻攻撃決行の朝である。

香取基地附近の天候は概ね良いが寒風は肌を刺すほどである。

整備員は昨夜夜を徹してこの整備作業であった。

午前八時、山澄参謀長が長官代理として特攻隊の出発を見送りに来た。

飛行場の指導所に訣別の盃の準備が整った。

私の発声で天皇陛下の万歳を三唱した。終って指揮所前に整列し、武田飛行長から行動要領について詳細説明があり、

続いて司令の出撃命令である。特攻隊員の腹は既に決っている。行動要領も了解して準備は出来ている。この上説明も不要であるし命令も不要である。唯々軍令を指揮官村川隊長に移すため私は型に従って出発命令を与えた。

司令の出撃命令が終ると、村川隊長は前に出ていつもの訓練飛行に出発する時と少しも変らぬ態度で「出発」と令して特攻隊員の敬礼に答えた。

出撃命令が終ると整備長大沢少佐の合図で整備員が一斉に飛行機を発動した。

やがて準備が整って特攻機は順序よく次々と出発点に向う。

この晴れの内地から飛び立つ初めての特攻隊出撃を見送るために隊員は飛行場に整列した。

開け放たれた風房から手を出して隊員に別れの合図をして順序よく離陸して行く特攻機。

これを見送る隊員は帽子を振って決死の戦友の出撃を祝福した。

誠に感激の一時である。

離陸した特攻機は漸次高度を取りながら飛行場を一周して目的地八丈島を向けて行く。

隊員は機影が南の空遠く消え果てるまで見送っていた。

香取基地と硫黄島間の気象を総合して攻撃実施可能と考え、午前九時卅分から同十時五分の間全機発進したのであったが、香取基地――八丈島の間に天候の不連続線が残っていてこれが突破困難となり約一時間の後飛行機が漸次引返えして来た。

当時航路の天候、特に硫黄島附近は下り坂で二十一日の天気は気掛りであった。

明くれば二十一日依然として骨に喰い入る様な寒さである。

気象係の将校が天気図を画いて持って来た。見ると航空路の天気は予期に反して良好である。智島以北は晴、父島以南は曇で高度は一千米乃至一千五百米を予想された。

昨日と同じように午前八時に飛行場を発進、十時までには全機八丈島に着陸した。

六、香取神宮社頭の祈り

全機八丈島着の無線電報を得て自分は副官を帯同して香取神宮に自動車を急がせた。

冬枯れたわびしい村々を過ぎ。短く青い田畑の麦を万感せまる想いでながめながら約四十分にして香取神宮の前に着いた。

武の神をまつる寂なる神域、朱塗の大鳥居をくぐり、古びた楼門を過ぎ、苔砌を渡って神前に額づいた。

最上の、そして適正な計画の下に勇断決行することは作戦企図達成の基礎であるが、天候、敵の出方等不測の事態が原因して失敗に終ることがある、これが天運である。

この硫黄島特攻作戦は十二日寺岡長官から企図を示されてから五日間武田飛行長と二人にて十分研究し尽した。また隊員に発表してからも研究会を行って慎重に計画をした。

特攻隊員志願の状況より見て士気は極めて旺盛であるし、隊員を決定して即ち死すべきことを決めてから日を経ていないのでこの士気は決して変っていない。

司令として着任して日なお浅く隊員の戦闘技術については知悉していないが、艦隊航空隊の残党であり、また村川指揮官は私の兵学校教官当時の生徒でその性格もよく知っているので十分信頼し得る隊員である。

残されるものは天運のみである。

信頼する部下の成功を祈るの余り、人事を尽して天命を待ち得ず天運を祈るこれが私を武神の神殿にぬかづかしたのだ。

これより外に致し様がなかった自らの姿であった。何時間経ったか何を考えていたかわからない。唯気が付いて神殿を退いた。

一切を割り切って晴々した心地で帰途についた。

七、攻撃決行

帰隊すると八丈島の特攻隊より電報が届いていた。矢は放たれた！　あと

はその矢が大きな的に的中するか、どうかである。信ずる部下の善処にまつのみである。

正午までに爆撃隊と援護戦闘機隊は八丈島を出発完了、雷撃隊は少し送れて午後二時までに一機残して出発したという無線電報であった。

短い冬の日ざしははや西に傾いていた。八丈島出発後は特攻隊は行動を秘匿するため一切無線電波を出さず一路決死の地硫黄島へ。

昔頼山陽は川中島の戦を謳って一節に曰く「鞭声粛々渡夜河」と、今日の戦闘にして見れば「爆音轟々電波を封鎖して太平洋を渡る」というところであろう。

午後四時になると突撃決行に間もない時刻である。待ち遠しいので電信室に行った。電信員は特攻機の電波を補足するのに全力を尽している。遠距離のため無線電信の感度が低いので、その努力が室内に入ってすぐ感ぜられる。電信長が近づいて来て「司令、まだ電波を出しません、空電がかなりあります」と静かに報告した。電信員が受聴器を余分に増設して黙って手渡して呉れた。自分もこれを耳に当てて眼をつむって聞き入った。

ヂヂーと空電が時々入る。それが大きくなり、また小さくなり、途絶える電信員が特攻機の電波を探して少し「ダイヤル」を廻すと他の部隊の電波が入る。

電信員が「ダイヤル」を左右に少しづつ廻して留めた。かすかな符号が入った。「ダイヤル」の目盛を見直して「第二攻撃隊の一番機です」確信をもって活々した顔でいった。間髪を入れず「突撃体形作れ」。とレシーバーから聞える。

「よし飯島中尉か」と思わず心の中でうなづく。時計は午後四時十三分である。

また符号が入った。四時十四分「司令『ユタ』です。三番機です。」という。「ユタ」とは輸送船に体当りをするという略語である。

また符号が入った。四時十五分「指揮官航空母艦に突入」と電信員の低い底力のある声。

ツ――と電波音が長く尾を引いて鼓膜から脳髄の真只中を突走る。電信員が「指揮官機が突入中です」という。

――ツツ。電波は切れた。「あッやったッ」安心感とともに熱いものがこみ上げて来る。電信員が「司令村川隊長母艦に体当り」と付け加えた。

特攻機が突入する時は先づ自機の固有の符号を出す。続いて突入する目標をいう。そして目標に向って突込んでいる間は電鍵を押したままでいるので「ツ――」と電波を出している。この符号が絶えた瞬間こそ、人と機と諸共に目標に命中吹き飛んだときである。

私は眼を閉じたまま、受聴器を外して電信員に返えした。そして室内各電信機についている電信員に眼を配った。

これで爆撃機の成功を確信するに十分である。

約一時間半遅くれて雷撃機の攻撃についても「一七四二」（午後五時四十二分）三番機『ユタ』連送」に初まり、「一七五二」クボチン（航空母艦轟沈の略語）「一八一七、われ突撃に成功」等成功の無線電信を受信し得たのであった。

攻撃実施については特攻攻撃なので目撃者がなく敵側の観測したところも併せ調査しないと正確を期し難いのであるが、無線電信の状況により推測して記載すれば次の通りである。

○第一攻撃部隊（彗星爆撃機四機、零式戦闘機四機、総指揮官村川大尉直率）

㈠ 爆撃機隊（彗星爆撃機四機、村川大尉直率）

一番機（操）大尉村川弘25才
（偵）飛曹長原田嘉太男

二番機（操）一飛曹田中武夫
（偵）上飛曹幸松正則

三番機（操）上飛曹青木孝允
（偵）少尉木下茂

四番機（操）上飛曹小石政雄
（偵）上飛曹戸倉勝二

午後四時十五分硫黄島の東三〇浬附近で敵航空母艦「ビスマルクシー」を発見、これに体当り攻撃を決行、四機のうち三機母艦甲板に命中し十五分間にして沈没せしめた。

「右については米国でも沈没した母艦名は、翌三月上旬発表した。そして乗員の三分の二は戦死すと報ず。掩護戦闘機指揮官岩下中尉は戦果報告のため父島飛行場に着陸したが、その報告によると三機命中して母艦は十五分で沈没したと。また終戦後米国報道記者の著「硫黄島」によると「ビスマルクシー」は日本神風機が二機命中して十五分間で沈没したと記述されている。

㈡ 戦闘機隊（零式戦闘機四機、指揮官岩下中尉）

一番機（操）中　尉　岩下　泉蔵
二番機（操）上飛曹　志村　雄作
三番機（操）二飛曹　長　与走
四番機（操）一飛曹　森川　博

爆撃機隊を護衛してこれが突入を確めた後附近の戦闘機を極力撃墜して自爆したるものと認む。但し岩下中尉は硫黄島の視界外であったため戦果報告

のため父島飛行場に着陸、報告後二十四日午前四時十七分攻撃再挙のため父島を離陸しようとして飛行場が狭いため海中に突入し重傷した。

○第二攻撃部隊（彗星爆撃機四機、零式戦闘機四機、指揮官飯島中尉）

㈠　爆撃機隊（彗星爆撃機四機、指揮官茨木中尉）

一番機（操）一飛曹　大久保　動
（偵）中　尉　飯島　晃
三番機（操）上飛曹　小松　武
（偵）上飛曹　石塚　元彦
四番機（操）一飛曹　三宅　重男
（偵）一飛曹　伊達　正一

右三機は戦闘機二機（茨木中尉、岡田二飛曹）に掩護されて進撃し硫黄島附近に至り午後四時廿分乃至四時廿五分頃輸送船に突入したものの如く、一番機は午後四時十三分「突撃隊形作れ」

三番機は午後四時十四分「輸送船に体当りす」午後四時二十一分突撃に成功す」

と電報を発信しにいる。

二番機（操）二飛曹　水畑　辰雄
（偵）上飛曹　下村千代吉

右は故障のため八丈島の出発遅れ掩護戦闘機二機（松重一飛曹、林二飛曹）に援護されて進撃、午後五時硫黄島の東四〇浬で「グラマン」F6F四機の攻撃を受け自爆す。

㈡　戦闘機隊（零式戦闘機四機、指揮官茨木中尉）

一番機（操）中　尉　茨木　速
四番機（操）二飛曹　岡田　金三

右二機は爆撃隊（一番機、三番機、四番機）を掩護して進撃し爆撃隊輸送船に突入の際にこれと行動を共にしたものと認む。

二番機（操）一飛曹　松重　幸人
三番機（操）二飛曹　林　光男

右二機は八丈島で出発の遅れた爆撃機（下村機）を援護して進撃中、午後五時硫黄島の東四〇浬で「グラマン」F6Fと交戦し爆撃機自爆のため爆弾を装備して再挙を計ろうとして父島に着陸、その際松重機は大破して父島に残留す。林機は父島で爆装をして再出発の際海中に突入して戦死した。

○第三攻撃部隊（彗星爆撃機四機、零式戦闘機四機、指揮官少尉柳原康男）

㈠　爆撃機隊（彗星爆撃機四機、指揮官少尉小平義男）

一番機（操）少　尉　小平　義男
（偵）上飛曹　新谷　淳滋
二番機（操）飛行兵長　川崎　直
（偵）上飛曹　小林　善男
三番機（操）一飛曹　池田　芳一
（偵）上飛曹　小山　照夫
四番機（操）二飛曹　北爪　円三
（偵）上飛曹　牧　光広

右四機は戦闘機二機（田辺一飛曹、古市飛兵長）に援護されて進撃父島北方にて「グラマン」F6F十機の攻撃を受けたが小山機及び牧機はこれを脱出して硫黄島に向いその後連絡なし。小平機及び小林機はその際被弾故障を生じ父島に着陸す。小平機は父島にて大破して父島に残留し、小林機は三月一日午後四時五分父島を発進硫黄島攻撃を決行した。

㈡　戦闘機隊（零式戦闘機四機、指揮官少尉柳原康男）

一番機（操）少　尉　柳原　康男

右は八丈島出発の際発動機故障で出発遅れ第二攻撃部隊戦闘機隊二、三番機と行動を共にし、午後五時硫黄島の九〇度四〇浬で「グラマン」F6F四機と交戦後父島に着陸の際戦死した。

二番機（操）一飛曹　田辺　信行
四番機（操）飛兵長　古市　勝美

右二機は爆撃機隊を掩護して進撃中、父島北方で「グラマン」F6F十機と交戦、一機を撃墜父島に不時着しようとして飛行機大破し父島に残留す。

三番機（操）一飛曹　長先幸太郎

右は八丈島を出発したが増設燃料槽の吸引悪く八丈島に引返えして残留した。

○第四攻撃部隊（天山艦上攻撃機四機、各機八〇〇瓩爆弾携行、指揮官中尉定森肇）

一番機（操）一飛曹　木須　奨
（偵）中　尉　定森　肇
（電）二飛曹　岡本　秀一
二番機（操）一飛曹　原口　章雄
（偵）二飛曹　清水　邦夫
（電）二飛曹　川原　茂一
三番機（操）少　尉　中村吉太郎
（偵）上飛曹　小島　三良
（電）二飛曹　叶　之人
四番機（操）二飛曹　和田　時次
（偵）二飛曹　信太　広蔵
（電）一飛曹　鈴木　辰蔵

午後二時八丈島出発、午後五時五十分硫黄島附近に到達夕闇迫って敵戦闘機のいないところをねらって輸送船に体当り攻撃を決行した模様である。発信電報によれば

三番機より「午後五時四十七分輸送船に体当りす」

四番機より「午後五時五十分輸送船に体当りす」

なお指揮官機は途中故障で午後四時五十分父島に不時着しようとして飛行機大破し攻撃に参加せず。指揮官機不時着後は三番機中村少尉が指揮をして硫黄島に向ったものと考えられる。

○第五攻撃部隊（天山艦上攻撃機四

機、四十五糎航空魚雷携行、指揮官中尉桜庭正雄）

一番機（操）上飛曹　村井　明夫
（偵）中　尉　桜庭　正雄
（電）上飛曹　窪田　高市
二番機（操）一飛曹　稗田　一幸
（偵）上飛曹　中村伊十郎
（電）二飛曹　竹中　友男
三番機（操）少　尉　佐川　保男
（偵）上飛曹　岩田　俊雄
（電）二飛曹　小山　良知
四番機（操）上飛曹　栗之脇　直
（偵）上飛曹　吉田　春夫
（電）二飛曹　吉本　静夫

八丈島着陸の際指揮官機は着陸装置を折損したため指揮官桜庭中尉は、四番機の栗之脇上飛曹に「貴様はここに残って、おれに貴様の機を貸せ」とどうしても攻撃に行くといっていやがる栗之脇上飛曹を無理矢理残留させ、自ら四番機で攻撃に出発した。午後一時十五分八丈島を三機で出発。午後六時前後に航空母艦「サラトガ」に攻撃を決行してこれを大破した模様である。飛行機隊より電報によれば、

三番機より「午後五時五十二分航空母艦轟沈」

機不明より「午後六時十分突入に成功せり」

機不明より「午後六時十七分突入に成功」

なお米国通信情報によれば大型航空母艦「サラトガ」は特攻隊の攻撃を受けて大破し、南洋群馬の海軍基地「ブラウン」に曳船して応急修理を加えた上米国西海岸に帰る」とあり、以後戦場に現われた形跡がない。

八、戦　果

第二御楯特攻攻撃隊の戦果を綜合すると

空母（艦型不詳なるも四囲の状況より特空母の算大）一隻轟沈
空母（大型空母）一隻大破炎上撃沈
略確実
戦艦（艦型不詳）二隻轟沈
巡洋艦二隻炎上二隻撃破
輸送船四隻以上轟撃沈
船種不詳一隻撃沈
（なお外に硫黄島より火柱十九本を認めた）

更に形而上の戦果は絶大で特攻隊の壮烈なる闘魂は全軍の士気を鼓舞したのであった。即ち硫黄島部隊指揮官市丸少将は同島機密第二一二三五一番電で

「友軍航空機の壮烈なる特攻を望見する等に依り士気益々昂揚必勝を確信敢闘を誓あり」と報告し

又母島警備隊司令は母警機密二二一六二七番電で

「当隊員も二十一日一七五五特攻隊戦果の火柱轟音を見聞し士気旺盛敢闘しつつあり」と報告した。

硫黄島作戦の戦果についてはその後米軍横須賀基地司令官T.P.THEW氏に問い合わせたところ次の回答を得た。

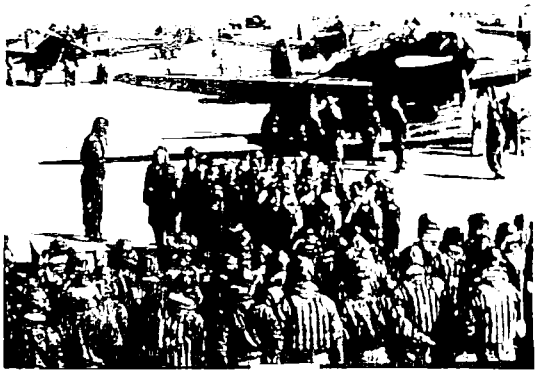
（訳文）

昭和二十年二月二十一日に五十機の日本飛行機が攻略艦隊に突入、壮烈なる攻撃を決行して五機がサラトガに命中し飛行甲板を破壊し飛行機格納庫を吹き飛ばし乗員一一〇名を殺し一八〇名が傷づいた。此の大被害でサラトガは戦列を離れて本国に帰った。

又警戒航空母艦「ビスマルクシー」は特攻機の攻撃を受け、火災を起して母艦の魚形水魚が自爆して沈没し約三四七名の将兵が戦死した。

ルンポインとケオクック（何れも輸送船と考える）は何れも神風機の攻撃を受けた。

斯くして昭和二十年二月二十一日は硫黄島攻略艦隊の最悪の日であった。



前直発出基地香取

硫黄島にある碑

第二御楯隊村川隊長に就いて

飯野　伴七

同期生　海軍601空戦斗機隊長　香取穎男談

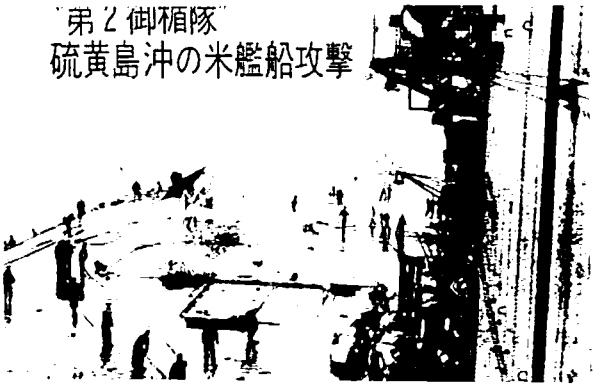
村川隊長とは601空で村川弘が艦爆隊長私が戦斗機隊長で、千葉県の香取基地へ移動する前、四国松山基地時代からよく二人で飲みに出かけたものです　村川はア号作戦において米グラマン戦斗機の機銃弾を背骨の脇に喰い、何回か摘出手術を試みたが果たせず、弾片を持った儘空母サラトガに体当り突入大破した

硫黄島に出撃の前夜村川と二人で飲み内地最後の夜を過したが、当夜の料理屋の襖にすらすらと辞世を筆で書いた

古の防人(イニシエ)たちが征きしてふ
道をたずねて、われは征くらん

忘れる事の出来ない豪快な海軍士官であった。

香取氏は海兵70期飛行学生戦斗機操縦専修　601空では村川隊長と同空に勤務



"第2御楯隊"
硫黄島沖の米艦船攻撃

20・2・21空母サラトガに第二楯隊突入

鹿屋特攻隊戦没者慰霊祭

平成9年4月4日鹿児島県鹿屋市特攻隊慰霊塔碑の前で、元海軍航空隊鹿屋基地より太平洋の大海原遠く又沖縄周辺艦艇に特攻出撃戦没された九〇八柱（海軍九〇〇柱陸軍八柱）の慰霊祭が執り行われた。ご遺族一一二名が全国各地より参列され、又全国各地から戦友、来賓、市民の方々六〇〇名近くの大勢が参加された。

当日雲低く雨模様であったが、会場横の公園の桜は満開で緑の若葉に映えていた。一〇二〇参列者一同着席、国旗掲揚、海上自衛隊鹿屋基地の儀杖隊による弔銃礼が行われた後、山下栄鹿屋市長の慰霊追悼の辞に始まり、全国甲飛会会長、鹿屋海上自衛隊指揮官等参列者の追悼の辞が捧げられた。

又ご遺族代表の挨拶に追悼の辞が述べられ、英霊を偲んで肺腑に滲み声涙にむせぶ言葉があって、参列者総員感銘に打たれた。

次いでご遺族代表の玉串奉典が行なわれ、ご遺族が粛々と続いて玉串奉典拝礼が行われた。続いて来賓・戦友・市関係者が続き、特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会を代表して、飯野が謹んで玉串奉奠拝礼し英霊の永久の平安ご冥福を祈った。

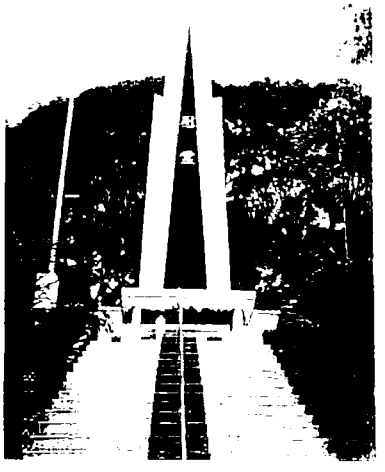
当日慰霊分列飛行の予定であった鹿屋基地ヘリ部隊は、雲高低く天候不良の為中止の止むなきに至ったのは残念であった。

来年平成10年の慰霊祭も桜花咲く4月の第一金曜日に開催する旨、市側より発表があった。

一一〇〇慰霊祭は終了し、国旗降下儀杖隊捧持してその場解散となった。

ご遺族はバスにて観光会館に案内、昼食会後希望者は直ぐ近くの海軍航空史料館を見学され帰途につかれた。

飯野伴七　記



ある郷土紙より

少年特攻隊員千田孝正伍長に感銘した少女達

この記事は愛知県丹羽郡扶桑町高雄定松郷二〇三仙田岑夫氏編集の郷土紙「コミニテイ南定松」に3回に亘り掲載されたものの抜粋であるが、第一回目は本会報13号（3年7月）で紹介済みである。今回はこの郷土紙11号（6年3月）と12号（7年7月）に出ているものを転載する。

第72振式隊千田孝正伍長は大正15年生れ少飛15期、20年5月27日九九襲で万世発進、沖縄南部洋上で散華。

〈郷土紙11号より〉

孝正隊員に相思の少女

三品　実

「コミュニティ南定松第五号」では、郷土の誇り、南定松が生んだ少年特別攻撃隊員「千田孝正」君の墓前に、二人の女性が訪れた物語を読んでいただいたが、昨年九月二十一日にも、別の女性一人が墓前を訪ね「お兄ちゃん！四十八年ぶりでございます。会いに参りました。」と声をかけ、敬虔な祈りを捧げた。

最後の宿舎で出会った少女

この女性は、東京都清瀬市旭丘二六一の一〇四に住む板垣レイ子さん。

千田孝正特攻隊員は、鹿児島の「万世飛行場」で最後の二日間を過ごした後、特攻に出撃していったが、その宿泊先は加世田町の旅館「飛龍荘」だった。旅館の十一才になる娘さんが、このレイ子さんだった。

孝正君の住所が「定光寺」だったことから、レイ子さんは「瀬戸市の定光寺」と混同してしまい、とにかく行けば簡単に判るだろうと考えて、先ずは中央線に乗り込み、定光寺駅で下車して探し始めた。定光寺違いに気付いたのはしばらく経ってからだったが、「犬山に行って扶桑町を探しなさい」と教えてくれる人があって、ようやく犬山に到着、臨江館まで辿り着いた。そこで電話帳を繰って、ようやく孝正君の住所と一致した住所を見つけ出し、敏男さん宅に連絡することができた。

「陸軍伍長・千田孝正」として撮影した最後のスタジオ写真

四十八年間抱き続けた思慕

翌朝、孝正君の恩師・亀井京一先生と敏男さんの二人の迎えを受けたレイ子さんは、ようやく墓前に到着、長年の宿願だった孝正君との対面を果たすことができた。

敏男さん宅には、孝正君の生前の手紙などが丁寧に保存されていて、その中にはレイ子さんが出撃前夜の孝正君の様子を細々と書いて留守宅に知らせてくれた手紙も含まれている。

四十八年ぶりに自分の書いた手紙に目を通したレイ子さんは、「あの時の情景が昨日のことのように鮮やかに瞼に浮かびます。改めて孝正兄さんの清烈な覚悟の程に、言い知れぬ深い感動を覚えます。日本を、そして同胞を、自分の命を賭けて守ろうと国に殉じていった純粋な若い魂の叫びを、私は決して忘れることはできません。今の若い人達にも、是非、あの叫びを伝えたい…」と、万感迫る思いに胸を詰まらせていた。以下はレイ子さんからの手紙の抜粋。

レイ子さんの手紙

（昭和20年5月28日付）

突然の手紙でびっくりされることでございましょうが、私は千田孝正お兄さんがご出発なされるとき、泊まられていた旅館・飛龍荘の家の者ですの。私は、千田お兄さんが「僕が死んだら、家へこまごま伝えて下さい」とおっしゃいましたので、乱筆でお分かりにくいことでしょうが、千田のお兄さんのご出発前夜のお話からお伝え致します。

千田のお兄さんは十二・三名の戦友の中で、一番張り切ってニコニコして、近所の子供たちと一緒に歌をうたって、一番の人気者でした。子供達は、夜も十時頃までお兄さんと遊んでいました。

その中で、お兄さんは私を一番可愛がって下さいました。お兄さんは、いつもお人形を四十個くらい、腰に下げていました。最後の夜だった昨晩は、そのお人形を子供達に分けて下さいま

したが、私は三つも貰いました。お兄さんは何だっていい物は私に下さいました。お兄さんはとてもお人好しでした。ですから私にとってお別れするのは大変淋しいことでした。

その前の夜は、私の友達と私とお兄さんと三人で、夜中の十二時頃までお話していました。もっと話をしていたかったのですが、兄さんは次の朝が早いので、おつかれになるといけないと思い、お話を止めて床につきました。

その晩はお月さまがよくさえていて、三人はその月を眺めながらいろんなお話が深まりました。そんな中でお兄さんは「私が死んだ夜には、この縁側に二人できて月を眺めていなさいよ。お兄さんが靖國神社の花の下から、いいお話をして上げるからね」とおっしゃいました。また「自分が死んだら私の家へ自分のことをこまごま書いて送って下さいね」と堅くお頼みになりました。

旅館・飛龍荘　孝正伍長は，ここで人生最後の日を過ごした。

私たちがお話している間、他の人達は家への最後の手紙を書いていらっしゃいましたので、お兄さんもお書きなさいよといいましたら、最後には一筆握られました。そして、「月明かりで書いたので読みにくいかも知れないから、その事を書いておいて下さいね」と頼まれました。

次に出発の朝のお話をしましょう。

「起床！起床！」の声で皆、一斉に飛び起きました。何をするにも一番早いのは、いつもお兄さんでした。

「きっと敵を轟沈させるのもお兄さんが一番乗りだよ」といわれて「カラカラ」と笑っておられました。

迎えのバスが三十分くらい止まっていましたので、その中でもお話をしました。お兄さんは出発するまで、いつものように朗らかに、ニコニコして、まるで初旅にでかけるような顔つき動作ぶりでした。編隊の指揮をする人も、「千田伍長は一番朗らかで、一番気が利いていた」といっておられましたし、指揮官の大尉さんも、とても褒めておられました。

お兄さんはこのように皆に褒められ、信頼されていましたから、どうぞご安心下さいませ。

また今度、ゆっくりお便りいたしましょう。聞きたいことがございましたら一筆お知らせ下さい。

……中略……

私の写真を一枚入れておきます。お兄さんの写真を一枚、お送り下さいませんでしょうか。どうぞお頼みいたします。

では、さようなら。お兄さんにお代わりして…。

昭和二十年五月二十八日　山下レイ子

御両親様

墓参を終わった

板垣レイ子さんからの礼状

（千田敏男氏あて）

毎日はっきりしない曇り日でございます。お変わりございませんでしょうか。

先日は、面識もいただいていませんのに、不躾に突然お伺い致しまして、大変ご迷惑をお掛け致し、誠に申し訳ございませんでした。それにも拘らず、ご家族の皆々様が心暖かくお迎え下さいまして、お礼の言葉もございません。本当に有り難うございました。

お蔭様で、永年、念願致しておりました孝正様の墓前へ額突く機会を持つことができまして、心からの喜びを噛み締め、かつ、安堵致しております。

帰りの車中では、一人、孝正様との出会いのことなど噛み締めながら、遠い昔に思いを馳せていましたら、ふと、そこに孝正様が現れて「レイ子さん！やっと来てくれましたね、ハッハッハ…」と笑いかけていらっしゃる様な思いにとらわれて、私も思わず、車中でニッコリ…。暫くは昔へタイムスリップして懐かしい二人の思い出に耽っておりました。

お礼を申し上げるつもりが、ついわがことばかりを申し上げてしまい、申し訳ございません。

……中略……

末筆ながら、本日は遅れ馳せながら、先ずは取り急ぎ、御礼までに認めました。

かしこ

平成五年九月二十五日　板垣レイ子

千田敏男様

追伸　孝正様はあの様な暖かいご家族のお一人でいらしたのだな…、と胸がジーンといたしました。

〈郷土紙12号より〉

南定松出身・少年特攻隊員 千田孝正君永世に輝く実証

三品　実

終戦の直前、昭和二十年五月二十七日、沖縄海域で二百五十kg爆弾を抱えて敵艦に突入、散華した僅か二十一才の特攻隊員「千田孝正君の壮烈な戦死は、何ものにも代え難たい壮挙だった。

一少女の心を動かす

この事実が、ある高校三年の一少女の心を動かし、一昨年暮れから彼女のお墓参りが始められた。

昨年のお墓参りは十月二十七日に行われた。戦後の日本社会は大きく変貌したが、その中で育った少女のこの行動は、私たち戦前派の人間の心に、何か深い思いを起こさせる。

この少女は、横浜市南区東蒔田八の八、マナリーズプラザ四〇二に住む佐々木麻香さん。三才になって以来、インターナショナル・スクールで外国人と一緒に英語で教育を受けているが、現在は高校部の三年生。

「コミュニティ南定松」の第五号と第十一号で紹介した話は、孝正君が生前に行き会った女性のことなので、遠方を厭わず来訪されたのも、素直な気持ちの表れとして理解できるが、佐々木さんの場合は、戦死後五十年を経てお参りしたいと訪問されたことなので、私は深い感銘を受けた。

少女の墓参

麻香さんは、孝正君の遺族、千田敏男氏宅に一昨年夏、最初の手紙（後掲）を書いた後、一昨年十二月、昨年十月と二回のお墓参りをしている。最初の手紙につづいて今日までに二十回を越す便りも寄せた。その中で彼女は「孝正さんをはじめ、特攻で亡くなられた方々に一度でいいからお目にかかりたい」と述べている。

以下、彼女からの手紙の抜粋を紹介しよう。

麻香さんからの手紙の抜粋

（平成五年八月二十六日付）

突然お便りしてごめんなさい。実は、昨年夏、九州の親戚で「知覧特別攻撃隊」という本を読んだのがきっかけで、知覧特攻平和会館に行って参りました。本に掲載されている写真に写っていらした方達のことを少しでも知ることができればと思い、会館にある写真を一枚ずつ探し、五名の特攻隊員の方々の名前などが分かりました。その時、御令弟孝正様のことを知りました。

それ以降は「空のかなたに」を始め、特攻に関する本を買い始めました。最近、苗村七郎著「陸軍最後の特攻基地」を買い、孝正様のご遺族・敏男様のご住所を知ることができました。早速、大変失礼とは思いながらも書いております。

私は、現在、外国人と一緒に英語で勉強する特殊な学校に通っていますが、日本の高校一年生に相当します。そんな私が、今まで生きてきたうちで何よりも一番感激したのは、あの本と知覧特攻平和会館でした。そして自分とは全く関係ないことで涙を流すのも生まれて始めてのことでした。

今年も知覧と、そして加世田市の平和祈念館に行ってきました。一番印象に残っていることは、寄せ書きに、孝正様だけが陸軍伍長と書かずに名前だけを書いていらしたことです。

私の学校では、成績上位の十名だけが、高校卒業論文を書くことが許されています。私は知覧へ行くまでは上位十名にはほど遠かったのですが、それ以降は頑張るようになり、お蔭で七位か八位で書けることになりました。

完成した論文はヨーロッパへ送られることを知り、特攻隊について書こうと思っています。将来は国連、または防衛庁で平和に貢献できる仕事をしたいとも考え始めました。

いつか孝正様のお話を聞かせていただけたらいいなぁと思っています。ご迷惑かも知れませんがお願い致します。

（平成五年一二月二六日付）

お宅を訪問させていただいた折に拝見しました孝正様の遺書やお写真、本当に勉強になりました。

論文は、特攻隊員の方々の「気持ち」を中心に書こうと決めておりますので、お写真の表情はとてもよい勉強になりました。孝正様の遺書には深い感銘を受けました。私より二つか三つしかお年が変わらぬ方がお書きになったとはとても信じ難たい思いです。また、普段の生活のお話もお聞かせいただき、当時の生活を知らない私にはとてもよい勉強になりました。

（以下略）

（平成六年二月十四日付）

さて、二月十四日はバレンタインデーです。チョコレートをお送りしますが、お気に召していただけるかどうか心配いたしております。よろしければお召し上がり下さい。

小さいのはどうぞ孝正様に…。

（以下略）

（平成六年四月十二日付）

孝正様の（地方誌の）記事とともにお写真もいただき、ありがとうございました。お写真はとても凛々しいお姿で、素敵です。

実は、来年から私たちの学校の卒業式が五月二十七日（今年までは六月第二週）と決まりました。三才から通っていた学校で、卒業式が孝正様の戦死の日と同じ日になったことが、とても不思議なことに思えます。（以下略）

（平成六年八月十二日付）

先日、加世田市平和祈念館に行って参りました。翌日は知覧平和会館へ行きましたが、当日は台風のため突然の停電で、全く参観することが出来ませんでした。とても悲しい思いで帰って参りました。

（以下略）

（平成六年十月二十九日付）

今年も孝正様のお墓参りができて、本当に嬉しく存じました。孝正様のお話をいろいろ伺っていると、一度でよいから孝正様にお会いしたいと思わずにはいられません。知れば知るほど孝正様や他の特攻で亡くなった方々とお会いできないことが残念でなりません。

私には五十年前の日本やその頃生きていた方達のことは「白・黒」でした想像できません。多分、見る写真が全部「白・黒」だからなのでしょう。

「孝正様達のような方達が生きていらした」ということも、なぜか夢のような気がします。今の日本のどこを探しても孝正様のような、ご立派な若い方はいらっしゃらないのではないかと思います。そういう素敵な方がいらしたことを知った私は、本当に幸せだと思います。

右上が千田孝正伍長

沖縄摩文仁台上
義烈空挺隊碑前祭

義烈空挺隊が沖縄読谷飛行場に突入したのは、20年5月24日である。空挺同志会沖縄支部では、この日に近い日曜日に記念行事を催している。空挺同志会とは、昔の空挺部隊にいた老兵、自衛隊空挺隊員及び空挺隊員だった者の三者で構成しており、沖縄支部も以前は旧軍空挺が三人いたが皆物故し、現在は現職自衛隊員二十数名で支部を構成している。沖縄に自衛隊空挺部隊がある訳ではない、習志野の空挺部隊にいて、その後沖縄の部隊に転属になった人達である。支部長は越前進三佐である。

支部長以下伝統を継承し慰霊行事を行っている。当日先ずかつての戦場読谷飛行場跡に行き往時を偲んだ。ここには「義烈空挺隊玉砕之地」という標柱が建っている。ついで島尻に引返し碑に面し支部長が祭文を奏上し、一同献花して簡素ながら心のこもった儀式を行った。空挺同志会本部からは谷脇副会長ほか一名が参列したが、この人達も戦後の空挺隊員で、今回は昔の戦友の参列はなかった。地元翼友会（沖縄の陸海軍航空関係者の会）からは代表の参加があった。

義烈碑建立の回顧

この碑を建てたのは昭和51年で、初め読谷あたりに建てようとする意見もあったが、参拝の便を考え摩文仁山頂にした。まだ慰霊公園になっていなかったが、二百坪の土地を購入して建碑委員会代表者名で登記した。石は発進基地熊本健軍飛行場の西に聳える金峰山から掘出し、海上自衛隊に頼んで那覇港まで運んでもらった。義烈の文字は奥山隊長の遺書に在る字を拡大して彫り込んだ。あの頃はまだ生残りの戦友も多く、協賛者も現れ、資金はたちどころに集り造園も立派にできた。その後県ごとの慰霊碑が多数でき、この辺一帯が県の慰霊公園となった。

祭文を奏上する越前支部長

反日歴史教科書の是正について（一）

元防衛大学校教授　桑田　悦

編者敬白　特攻烈士が一命を棄てて護ろうとした祖国を塵芥の如く軽侮する輩の横行する現在、後に続くを信じて征かれた特攻隊員の慰霊顕彰の第一歩が、この弊風打破にあるのはまことに情ないことである。特攻散華された先人の偉業を後世に伝えることだけでなく、それが正しく理解される日本人就中日本の青少年を作ることにも、我が会は力を尽くさねばならぬ。

此の度、会員の桑田悦氏からこのような投稿を頂いたので、如上のような趣旨で連載することにした。

名誉と威信を放棄した今日の日本

ペルー大使公邸人質事件では、テロ集団はアメリカ大使が退出した後に公邸に突入し、アメリカ人の人質は最初に全員を釈放したようだ。テロに対しては絶対に妥協せず、世界の何処であろうともアメリカ人の生命財産は武力を行使してでも守る政策を断固として貫く用意のあるアメリカに対してはテロ集団も敵とすることを避けたのだろう。これに反して、「人命は地球よりも重い」としてテロ集団に降伏して超法規的措置を講じ服役犯を釈放したり、唯々諾々として身代金を支払う日本人はテロ集団にとって最も扱いやすい敵である。今回はペルーのフジモリ大統領の断固たる決意で好機を選んでの強行突入で解決したが、未だに強行突入を批判したり、テロ集団の全員射殺を批判する論調も跡を絶たない。そういう態度が日本人に対するテロを誘発しがちな危険に気が付かないのが平和ボケした日本の実態だろう。

辻村明氏はダッカ事件の時の「フランス・ソワール紙」の次の記事を引用しておられる。「かっての日本のカミカゼ特攻隊のパイロットたちは、五、六人の乗っ取り犯に、みじめに降伏する現在の日本を天国から垣間みて、なんという腑甲斐ない祖国のために、自分たちは生命を捧げたものか、と自問するに違いない」

だが今日の日本の醜態は単にテロに対する態度だけではない。日中・日韓国交正常化に際して相互の内政不干渉を約したにもかかわらず、義務教育段階の教科書内容に対する干渉や、首相の靖國神社参拝に対する内政干渉に唯々諾々として屈してひたすら謝罪外交によって相手の意を迎え、国家の名誉と威信を自ら傷つけている。

日本人の拉致事件に対しても本気で追求しようともせず、楽園と欺かれて北朝鮮に行った日本人妻の帰国や里帰りも強硬に要求することもなく、人道的援助の名の下に北朝鮮への食糧援助を続けようとして、国家の誇りも威信も国民の生命・人権も放棄している。

国家を守るために命を捧げた英霊に対する感謝を忘れた国、靖國神社・護国神社に対する僅かな玉串料を公費から支払うことにすら最高裁判所が政教分離に対する違反として違憲判決を出す国に対して、今後果して誰が国を守るため命を捧げるだろうか。

そしていまだに冷戦態勢の残滓が残っていて不安定なアジア太平洋地域には、核・化学兵器・生物剤兵器等を開発し日本全域に届くミサイルを装備している国が近隣にも多い。そういう国から大量破壊兵器を搭載したミサイルによる恫喝を受けた場合に如何に対応しようとするのだろうか。大量の軍事力を保持しつつ海空戦力の近代化・海洋を越えての戦力投入準備を着々と進めている国が大陸棚の資源を求めて領海に進入し海底資源の探査を進めているのに強い抗議もしない国、我が国の資源輸送路を擾乱される危険に無関心なように見える国、自ら侵略を抑止できる自主防衛力の整備にも不熱心なまま、同盟国の支援を受けるに不可欠な集団自衛権の行使も自ら否定していて、アジア太平洋地域の安定のために動こうとしない国、果してこれで明るい二十一世紀が期待できるだろうか。

散華された特攻の英霊達が身を殺して守ろうとされたのは、こんなに自ら名誉と威信を傷つけ外国から侮られ見くびられるような明るい展望を見出し得ない国だったのだろうか。こんな情けない国の状態を放置して散華された英霊に相済むものであろうか。

虚構の従軍慰安婦強制連行問題等

昨年文部省の検定を終わった中学校社会科（歴史分野）の教科書は日本国民に大きな衝撃を呼んだ。その中に「従軍慰安婦の強制連行」や「南京事件二、三十万虐殺」、「三光作戦」等々の日本国家・日本軍の悪行が記載されたからである。その当否をめぐって識者の間に大きな論議が巻き起こった。

「従軍慰安婦」という用語自体が当時の用語ではなく、戦後に突如として使われだした言葉である。当時一般に行われていた公娼制度の延長として業者の運営する慰安所が各地にあったことは周知のことであり、また世界各国ともそれぞれの慣習に沿って「軍隊と性」の問題を処理してきたことも周知のことだった。しかし「従軍看護婦」「従軍僧（牧師）」「従軍記者」等々のように軍属ないしそれに準ずる身分と

法制の下に設けられたものとは異なる、単に業者に雇用されて戦地で営業したに過ぎない者に「従軍」の名を付けて呼ぶのは意図された詐術だろう。そういう詐術を含んだ悪意の中傷に対して当時の実態を知る者の側から大きな反発が生じたのは当然だろう。

この問題が教科書に登場するに至ったのは、第一に平成5年8月の河野官房長官談話で「募集、移送、管理等も甘言、強圧による等、総じて本人たちの意思に反して行われた。……慰安所における生活は強制的な状況で痛ましいものであった。」とされたことが最大の根拠となった。第二に、朝日新聞が意図的にか無意識にか虚報を通じて煽ったからであった。まず、朝日新聞は秦教授によって職業的詐話師とまで言われるに至った、吉田清治（実名は於兎）氏が綴った済州島における官憲による朝鮮人慰安婦強制連行の記録を真実かの如く持て囃した。これは後に現地紙や秦教授等によって真っ赤な作り話と判明し、吉田氏自身が「週間文春」誌上で作り話と認めたのだが、朝日新聞は今日に至るまで訂正していない。次に平成4年1月の紙面で「軍慰安所従業婦募集ニ関スル件（陸支密第七四五号、昭和13年3月4日）」の通牒を、「慰安所・軍関与を示す資料、募集含め統制・監督」と大々的に報道したが、実はこれは悪質な業者が偽って募集したり強制連行したりしないように軍が善意の関与をするように通達したものであったのに、その肝心な部分をわざと紙面から欠落させたまま、あたかも軍が強制連行に直接関与した証拠のように報道した。

参議院における板垣正、片山虎之助、小山孝雄各議員の追求によって、遂に政府委員平林博外政審議室長は、「政府が調査した限りの文章の中には、軍や官憲による慰安婦の強制募集を直接示すような記述は見出せませんでした。」と答弁し、国会議事録にも記載されるに至った。

そして軍や官憲による強制募集の証拠になる文書は見出せないのに、何故河野官房長官は強制連行を認めるような談話を発表したのか、という点について、平林局長は「元従軍慰安婦とされる方々本人、それからいろいろな研究者、学者等の証言を含めて総合的に判断した。」と答弁した。韓国政府は当初この問題に積極的でなかったが、日本の弁護士が韓国のラジカルな団体と連携して「こんなことでいいのか」と説いてまわり、この動きと連携する形で日本のマスコミも激しく批判したため、韓国政府も元慰安婦の名誉のため「本人の意思ではなかった」という元慰安婦の証言を聞き取り調査してもらいたいと要請せざるを得なくなった。こうして行われた慰安婦十六名の聞き取り調査は、韓国の太平洋戦争犠牲者遺族会がまとめた元慰安婦の証言集とともに、公開もされず、その証言の事実関係の裏付け調査もなされていないものであった。このようなあやふやな根拠からあえて「強制連行があった」ように捏造した理由について、当時の石原副官房長官は、産経新聞社・桜井良子女史の質問に答えて、強制連行を日本側が認めれば、元慰安婦の名誉も回復され、この問題がおさまるだろうと判断した、と述べている。

このような事態の思わざる進展の下に、朝日新聞は今年3月末の紙面で、問題をかって朝日自身が強調した強制連行の有無ではなく、慰安所の設置という広い意味の強制、奴隷的制度であると問題の焦点をぼかして問題を拡散しようとした。

もはや「従軍慰安婦強制連行」問題について客観的事実としての決着は明らかである。そして実際には韓国の元慰安婦の名誉は回復されたかも知れないが、この捏造された河野談話を根拠とする国連クマラスワミ報告と教科書への掲載によって、日本国家の名誉は将来にわたって大きく傷つけられた。今後は河野元官房長官談話の取り消し、教科書からの削除と河野元官房長官等の国辱作為への責任追求のみが残っている。

南京事件三十万虐殺について

東京裁判では検察側は南京市及び周辺で二十ないし三十万が虐殺されたと主張し多数の証拠を提出したが、その多くは出廷せず、宣誓供述書または単なる陳述書で提出されたもので、反対尋問も行われず、パール判事も主張されたように真偽の疑わしいものだった。裁判所の一般判決では殺害された一般人と捕虜の総数を二十万以上とし、松井被告に対する個人判決では十万人以上としており、虐殺者数は一定していない。現在中国側では三十万人大虐殺としており、既に（政治的？に）決まった数字だからと日本側の共同調査の申入れを受け入れない。

これに関する日本側の最も厳密な調査結果は平成元年11月に偕行社から発行された『南京戦史』である。これは各部隊の戦闘詳報等の記録、内外の資料等まで集めて検討されたものだが、これによると当時の南京防衛中国軍の総数は六ないし七万、そのうち戦死者（戦傷死を含む）約三万、南京からの脱出者約一万八千人で残りの約一万二千ないし二万二千が捕虜及び処断されたものとしている。また、一般市民の死者については、最も綿密・学問的と

みられる当時金陵大学教授スマイス博士の調査結果を採用して南京市部の死者二、四〇〇、拉致四、二〇〇、近郊の江寧県の死者九、一六〇合計一五、七六〇名としている。その中には軍服を脱いでゲリラ化したもの、逃亡しようとして射殺された等戦時国際法の保護対象とならないもの、後述の中国側の「空室清野」作戦で南京近郊の農村を焼いた際の被害者等も含まれる。

日本軍入城の際には一般市民のほとんどは国際委員会が設置した安全区に集まっており、その総数は約二十万であった。翌年三月の南京市の人口は二十ないし二十五万とされており、同年1月14日に日本軍に登録された市民（十歳以下の子供と老婦人を除く）は十六万人でこの点からも二十、ないし三十万人の大虐殺は有り得ない。秦郁彦教授は市民を含めて被害者約四万と推定している。

若干の虐殺・強姦があったことは事実と思われるが、日本軍が南京に迫ると中国軍は「空室清野」として近郊の農村を焼き払い略奪した。日本軍は南京城外郭の主防御陣地に迫った後、12月9日「和平開城ノ勧告文」を城内に送ったが、中国側防衛司令官唐生智はこれを拒否した。固守を主張していた唐生智は開城勧告を拒否しながら日本軍の重囲に陥った12月12日夕、各部隊各個に包囲を突破して退却せよ、と命令して自らはひそかに北岸に逃走した。最高司令官に見捨てられ指揮組織が崩壊した中国軍各部隊は、突入する日本軍に抵抗しつつ間隙を縫って逃走しようと乱戦に陥った。日露戦争の旅順要塞のようにロシア軍が秩序を保って整然と降伏したならば、部隊のゲリラ化も市民の被害も生じないが、攻略戦と城内ゲリラの掃討とが判然と区別し難い乱闘の中では、捕虜の処断や市民の被害も避け難いのが戦いの実相であろう。南京で捕虜と市民を含む虐殺が生じた第一の責任は、当初死守を呼号した唐生智防衛司令官が開城勧告を拒否しながら、部下を置き去りにして逃走した点にあると思う。

三光作戦について

中学社会科（歴史）教科書には「一九四〇年（一九四一年とする教科書もある）ころ日本軍は、共産ゲリラの強い華北の村々で、『焼きつくし、殺しつくし、奪いつくす』三光作戦を行い、民衆に恐れられた」等と書いている。支那事変に際して中共首脳部は国民政府側と「抗日民族統一戦線」を組み、国民政府軍に日本軍と戦わせつつ、中共軍は華北の日本軍占領地の後方にゲリラ根拠地を築いた。一九四〇夏に華北の中共ゲリラは一斉に日本軍占領地内の分散した守備隊と鉄道線や鉱山を襲撃した。これを百団大戦という。それまであまり中共軍について警戒していなかった華北の日本軍も、これ以後中共軍のゲリラ討伐に努力を集中し、やがて華北の中共軍に大きな打撃を与えて治安も向上してきた。

ゲリラ戦とは民衆を巻き込み、「民衆は水、ゲリラは魚」といわれるように追われれば民衆のなかに隠れ、機を見て敵の後方を攻撃する戦い方である。ゲリラ戦では都市や主要鉄道沿線等のような日本軍の支配地区、交通の不便な山村等のようなゲリラの支配地区、両方の中間地区の三つが混在し、互いにその支配地域を広めようとする。ゲリラの支配地区に対しては討伐隊を派遣してゲリラを討伐するが、住民がゲリラに日本軍討伐隊の情報を提供したり、ゲリラを匿ったり、ゲリラに食糧等を供給するので、ゲリラから住民達を引き離してゲリラを撃滅する機会をつくろうするのが普通である。ベトナム戦の米軍も「戦略村構想」と称して、ゲリラ支配地域の農民をゲリラが入り込めないように防備した地域に移してゲリラと分離しようとしたが、うまく行かなかった。当時の北支那方面軍の岡村寧次司令官は、「焼くな、犯すな、殺すな」という三戒標語を強調して、住民の信頼を得ることによって日本軍支配地域を広めゲリラと民衆を分離しようとした。

日本軍が「三光作戦」を行ったというのは、終戦後ソ連に抑留されていた将兵のうち、中共に引き渡されて撫順戦犯管理所に抑留された人々の供述調書を基礎として言われ出した話である。だが、田辺敏雄氏が、三光作戦を行ったとされる部隊の戦友会や各地に在留した方々に詳しく当たって調べた処では、三光作戦という名称も知らなければ、伝えられるような住民を抹殺するような作戦をした覚えもない、という答えしか帰ってこなかった。詳細は田辺敏雄氏著『正論』平成8年10月号の「沈黙が支える日本罪悪史観のウソ」、同12月号の「三光作戦の教科書削除を要求する」を参照願いたい。

もし日本軍が本当に「三光作戦」を行ったのであれば、多くの旧軍人がその名称を知っており、またその命令書の写し等が残っているはずだが、旧軍人で「三光作戦」という名称を知る人はいない。だいたい「光」という字を「つくす」と読んだり、その意味に使うことは日本語の使い方ではない。

一九三〇年代に蔣介石の国民政府は瑞金の中共軍根拠地の包囲討伐戦を何回も行ったが、「三光政策」とはその間に蔣介石が中共軍の根拠地を絶滅させるために採った政策だといわれる。

前掲の岡村方面軍司令官の三戒標語を裏返した捏造である可能性が高い。最近、撫順戦犯管理所からの帰還者の会の会長富永正三氏から、中共側の人道的戦犯容疑者取扱に感動した抑留者の正直な告白だとの反論があったが、氏の所論の中には撫順戦犯管理所で昭和29年から31年頃にかけて猛烈な吊るし上げが反覆され謝罪・告白が行われたと書かれており、この間に洗脳によって偽りの告白文が作られた疑いが濃い。「万人坑」とともに「三光作戦」も、中国の文化大革命の際に当時の中共首脳の政策に迎合すべく反日的虚構が作られたと推定することが妥当なように思われる。

三つの虚構の削除だけで満足するな

従軍慰安婦強制連行、南京三十万大虐殺、三光作戦等、今回の中学社会科（歴史）教科書に新しく登場した三つの虚構は、既に述べたように一部の反日的文化人によって煽られ捏造されたものであることが明らかである。

そんな虚構を義務教育である中学校の教科書に載せることは学校教育法や教科書検定規則にも反する行為であって、速やかに削除することが当然だが、それだけで満足してはならない。

私共は従来子供や孫達の受けている教育の中身について無関心過ぎたのではなかろうか。今回の教科書騒動を通じて、新しい中学校教科書と現在使われている小学校教科書を改めて良く読んでみると、後に詳しく述べるように歴史の見方が歪んでいるのに驚く。これでは子供達が歴史の授業を「また日本の悪口か」と嫌がり、「日本はとんでもない悪い国だ」と受け取って恥ずかしく思うのも無理はない。

社会全般と同様に歴史にも必ず光と影の部分があるが、幼い時代にはまず肯定的な生き方を育てることを主眼として、光の部分から教えることが望ましい。まず肯定的な生き方の基本ができた後に、学習と智恵の発展とともに人間社会に必ずある影の部分とそれが生ずる原因とを事実に即して考えさせれば良い。初めから人間社会の影の部分だけを強調した歴史を学ばせることは、子供の健全な人間性の発展を歪め、悪質なイジメや援助交際等々の蔓延を育てる結果となる。白紙の子供達には、歴史を通じてまず自分達の祖国に愛着と誇りを持ち、今日の日本を作り上げてきた祖先に愛情と感謝の気持ちを育ててほしいのに、現在の歴史教科書からは世界の国々の実態もその中での自分の祖先達の悩みも苦しみも伝わってこない。ただ自分達の祖先は世にも稀な悪逆非道な悪者達のように受け取られるだけである。

占領軍・共産党の日本弱体化のための反日歴史教育からの脱皮が焦眉の急

昭和20年9月米国政府は日本占領の究極目的を「日本が再び米国の脅威となることが無いように改革する」とした「降伏後ニ於ケル米国ノ初期ノ対日方針」を発表し、連合軍最高司令部は10月2日に一般命令第四号で「各層の日本人に、現在および将来の日本の苦難と窮乏に対する軍国主義者の責任、連合国の軍事占領の理由と目的とを周知徹底させる」計画の実施を指令した。昭和27年4月の対日平和条約発効による独立回復までの期間、日本全土は占領軍の厳しい言論統制（言論統制の実施そのものも秘匿）の下に置かれ、主として共産主義に親近感を持つ要員の多い民間情報教育局の手で、日本軍国主義者・超国家主義者の言動が厳しく摘発・糾弾された。

同年12月8日から全新聞紙に「太平洋戦争史」が連載され、翌夜から連続ラジオ番組「真相はこうだ」が放送され、翌年5月から東京裁判が開かれて、昭和3年以降の日本の戦争はすべて侵略戦争であり、一部の軍国主義者・超国家主義者が共同謀議で国民を欺いて平和に対する罪・人道に対する罪を計画・実行した、日本国民は近隣諸国に対する加害者である、と強調した。さらに玉砕・特攻等に恐怖した米国は、その根源である神道信仰と皇室崇拝を破壊しようといわゆる「神道指令」によって、あらゆる教科書から神話と神道教義を削除させ、絶対平和主義と個人の人権偏重に基礎を置く米国製憲法が押し付けられ、無国籍的な教育基本法が制定された。

東西冷戦の開始とともに米国の対日政策は「日本を極東の反共の砦とする」方向に変わったが、左翼勢力は東側共産陣営に有利な国際情勢とするため、日本の共産化、少なくとも中立陣営化と弱体化を目指して活動した。平和憲法護持・自衛隊違憲論・日米安保反対等々はそのためのテーマであり、日教組はこれらのテーマで子供たちを洗脳するための活動に奔走した。こうして我々がそれぞれの仕事に奔走している間に、我々の子供・孫たちは世界にも類の無い祖国を罪悪視する歪んだ歴史教科書で教えられるようになった。

占領下で知識人として活躍した人々及びその後継者の人々には、自ら志してあるいは心ならずも日本弱体化政策の一環を担った人々もいる。現在六十二歳の方は占領軍の洗脳下で学齢に達した方で、今日の社会には東西冷戦下に洗脳された方々も多かろうが、その洗脳を脱して国際的通念の国家意識と愛国心を回復することが急務だろう。

昭和殉難者 碑前祭二題

極東国際軍事裁判（東京裁判）をはじめとする各地で行われた彼等の称える戦争裁判は、裁判の仮面を被った復讐の軍事行動に過ぎぬ。東京裁判はマッカーサーの作った事後法によって裁かれた。その無法振りは今や定説となっているが、東京裁判史観は民族の心を蝕んで今日に及んでいる。彼等のいうBC級裁判に至っては、法がなければ法を作り、証拠がなければ証拠を捏造し、証人がいなければ証人を募集し、戦の原則を適用したもので到底裁判とは言えぬ。

我々はこれら殉難者の鎮魂もより大切であるが、彼らの犯した欺瞞を糾弾し、現下世に横行している自虐的、反日的史観撲滅の足がかりにすることが肝要である。

これがこのような行事を「特攻」紙上で論述する以所である。

4月29日には高野山で、5月18日には熱海伊豆山で、それぞれ法要が営まれた。

高野山奥之院に在る 昭和殉難者碑

恒例の法要は本年も4月29日に遺族や、合祀者に縁故の深い者約三〇〇名参集のもと行われた。この碑は平成6年前橋予備士官学校出身者が中心となって建立し、翌7年から8年にかけて霊標に一一七六柱の霊名を刻み、更にその後判明したものを合祀し、現在は一一八八柱となっている。

毎年の供養は仏式に因み五十年忌としているので、本年は昭和23年に刑死（獄中の自決及び事故死等を含む）を主対象としているので該当者二三五柱である。

死没年月日、氏名、出身県、階級、年令、裁判国、死別（絞首、銃殺等）場所を記入した一覧表がある。それを見詰めていると、戦慄んで三年後、無念だったろう。日本民族として、この怨み忘ることはできぬ。

和歌山偕行会畑山会長が次の祭文を捧げた。

当日祭典委員長が捧げた祭文の要点

……勝に乗じた連合国は、自ら数百年にわたるアジヤ侵略と植民地支配を棚上げし、戈を収めた我が国に対し、大東亜戦争を日本の侵略戦争と決めつけ、人類史上かつて例のない戦犯裁判という新手の攻撃を開始するに至りました。

東京で行われた極東国際軍事裁判はじめ、連合国各地の裁判は、国際法を無視し、法なきところに法を作り、事実の歪曲、証拠の捏造など欺瞞に満ちた違法不当な、史上類のない残酷なものでした。戦犯裁判はまさしく、勝者が敗者を裁くという怨恨と復讐の儀式であり、裁判という名にかくれた連合国の報復的な軍事行動でもありました。

我が国は戦には負けましたが、緒戦の日本軍の華々しい勝利は、長年虐げられていた全アジヤ植民地民族に勇気と自信を与え、戦後自らの力で独立を獲ち取りました。かくて日本が標榜したアジヤ民族の解放は見事に達成されたばかりか、全世界から植民地が一掃されました。これを成し遂げたのが大東亜戦争であり、その功績者は実に皆様方二百五十万の御英霊でございます。只今追悼碑を仰ぎみれば、御霊の御無念、悲憤の最後を遂げられた御心情が油然と湧き痛恨の涙を禁じ得ません。

7基の霊標に1188柱の霊名が県別に刻まれている

薩摩琵琶

戦犯の歌（当日朗詠された）

作詞　澤　栄作
奏者　田中之雄

作詞について

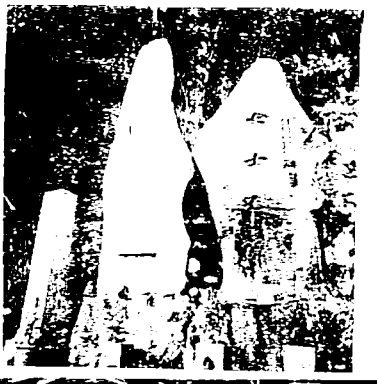
この歌詞は陸軍大佐澤栄作氏が昭和二十二年六月広東にて銃殺刑に処せられる直前に遺歌として作られ同獄の三好俊良陸軍大佐に託されたもの

萬物和みそだつなり
月に叢雲花に風
我が日本を襲ひけり
戦雲四方に張りて
皇の勅をかしこみて
夫れ天行は健かに
されど無常の理は
さしも金甌無欠なる
頃しも昭和の御宇なりけり
いまは耐えなん術もなく

熱海伊豆山にある
興亜観音例祭

興亜観音建立の由来や現況等は「特攻一24号（平成7年8月）に詳述したので重ねて述べないが、ここには東京裁判で処刑された七士の御遺骨（火葬場に棄てられた残骨を秘かに持出したもの）を納めた墓と、各地の戦争裁判で処刑された一〇六八柱の名簿を納めた供養塔がある。

例祭は妙徳尼、妙珖尼、妙浄尼三姉妹によって行われた。参列者は興亜観音を守る会会員約二百名。法要終了後徳富一門による奉納演武が行われた。



右七士之碑
左殉国刑死一〇六八柱霊位供養碑

降魔の利剣うち佩きつ
戦の庭に立ち向ふ
鉄をもとかす南溟に
術をつくして戦ひぬ
老も若きもおしなべて
されど時利あらず難行かず
大勢日々に不利にして
大御心の在すまゝ
一時の恥をしのびつつ
こゝに憐をとゞめしは
ふかき愛のその中に
独り異域に残されて
戦犯の様奏でんに
敬ひしたひし上官も
迎への船にいざなはれ
春は花咲き鳥唄ひ
皎々たりや秋の月
四季とりどりのおとづれも
思へば長き戦場に
晝夜寒暑ものかわと
樹てし功の数々も
独り獄屋に端座して
愛し祖国よ三千里
生死伝えん術もなく
あはれ獄屋の明け暮れは
月日移りて果ての日は
鬼畜の如き群衆の
心ある者忘るなよ
無念の涙しのびつゝ
国に殉ぜし戦犯を

正義の師をぞ起しける
戦人らは勇ましく
朔風荒ぶ大陸に
国に残りし民草は
精の極りをつくしける
四海を挙げて我を攻む
いまは施す術もなく
聖慮を仰ぎかしこみて
無念の局を結びけり
国破れたる悲しみの
あらゆる自由奪はれつ
獄屋に深く繋れし
聴く人誰か泣かざらん
生死を誓ひし戦友も
遠く祖国にかへり行く
夏は岸辺に蛍飛ぶ
寒さ身にしむ冬の空
囹圄の身をばいかにせん
東に奔り西に行き
唯ひたすらに戦ひて
いまははかなき夢と化す
瞼にしのぶ東の
翠なき身のいかにして
悲運を嘆くばかりなり
この世の地獄さながらに
街のすみずみ引廻し
歓呼の中に鬼と化す
戦敗れしその蔭に
祖国の方を伏し拝み
国に殉ぜし戦犯を

英霊は嘆く〝ああ残念なり〟と

それは愛媛玉ぐし料訴訟違憲判決のことか

田中　賢一

終戦によって部隊が解散した後も、第一挺進団の隷下及び指揮下の各部隊長及び若干の将校・下士官は、残務整理の為11月末まで宮崎県川南村に在った団司令部に詰めており、第一挺進戦車隊長の私もその一人だった。義烈空挺隊が沖縄に向ったとき、故障で不時着し生き残った山田中尉も、残務整理の為暫く川南に残っていた。彼は奥山隊長や自分の小隊で別の機に乗って征ってしまった人達のことばかり口走り、仕事も手につかなかった。

延岡市の南に門川という町があり、そこに牧山さんという占師がいて、死んだ人と話が出来ると評判だったので、私は山田中尉を誘って牧山さんを訪れた。しめ縄を張った余り大きくもない家の庭には、戦場に征って生死不明の息子や夫のことを尋ねる為、何名かの人が順番を待っていた。やがて私共の番になり、薄暗い屋内に入った。霊媒は老婆だった。山田中尉が一部始終を語り、奥山隊長はどうなさいましたか、と尋ねた。

老婆は頷いて神棚に向い一心不乱に禱った。次第に体が揺れ、髪は乱れ鬼気迫るものがあった。そのうちに座ったままの姿勢で一尺ほど飛上り、バッタリ倒れて動かなくなってしまった。私共は呆気にとられて眺めていると、やがて起上りこちらを向いて「只今奥山隊長様にお会いしました。隊長様は〝ああ残念なり〟と一言いわれただけで行ってしまわれました」と告げた。山田中尉はその場に泣き伏してしまい、私は彼を扶けて牧山さんを辞去した。奥山隊長の〝ああ残念なり〟とは何を指すのか、渾身の決意をもって行った沖縄の飛行場殴込み作戦が、予期した成果を挙げ得なかった為か。それとも多くの特攻隊員の悲願空しく敗戦に至ってしまったことか。そのときは、かように考えて門川を後にした。

あれから五十余年、戦争に敗れたが国は亡びなかった。しかし、今ここに再び霊媒を介して特攻の英霊に尋ねたら、何と答えられるか。亡国の危機迫ると言われはしないか。愛媛玉ぐし料訴訟の最高裁違憲判決の如きは〝ああ、残念なり〟どころではない。

前号でこの問題に少しく触れ、外道（原告）と法匪（違憲を称えた判事）の合作がこのような結果を生んだと言ったが、もう一つ見方を変れば、この憲法を作ったマッカーサーの幕僚共の狙いと、日本最高裁判事の汚染された化石的頭脳が、このような判決を導き出したと言えよう。抑々この憲法はマッカーサーの命令によって、GHQ民政局の二十一名の幕僚が21年2月4日から一週間餘で起草し、2月14日日本側に手渡されたものである。その際民政局長のホイットニー准将は吉田茂外相や松本丞治国務相に言ったという〝最高司令官は、天皇を戦争犯罪者として取調べるべきだという他国の圧力から、天皇を守ろうとする決意を固く保持している。だが最高司令官といっても万能ではない。ただ、最高司令官はこの新しい憲法の諸規定が受け容れられるならば、天皇は安泰になると考えておられる〟と言い更に、この案は日本政府が作り、最高司令官の完全な了解を得たものだと、国民に示せと迫ったのである。

日本政府はこれに対し懸命に反論したが、絶対的権力を持っている先方が聴く筈がない。結局殆どGHQ案と変わらないものが、枢密院で諮詢され、ついで帝国議会で審議された。3ヵ月半の審議により若干の修正はなされたが、それは全てGHQの承諾を必要とした。日本占領基本法ともいうべきこの疑似憲法は、昭和21年11月3日公布された。この日帝国議会貴族院本会議場における式典では、両院議員、閣僚等が居並び、招待席には連合国関係者が詰かけ、天皇陛下は新憲法公布の勅語をお読みになられた。これより先、マッカーサーは〝余は日本の天皇ならびに政府によって作られた新しく旦つ開明された憲法が、余の全面的承認の下に、日本国民に提示されたことに、深く満足する。〟という臼々しい声明を発表した。

さて、この憲法の今回の玉ぐし料に関する政教分離の条項をみるに、それは20年12月にマッカーサーが出した「神道指令」と軌を一にしている。戦場に於ける日本軍の精強さは、日本古来の敬神の念にあると彼等は恐れを抱いた。神風特攻隊と神道とは直接の結びつきはないが、彼等は「カミカゼ」と聞いただけで、身の毛もよだつ思いがしたのであろう。神と政治の繋りを断ち切ることを喫緊事と考えた。

神道指令――正確に言うと「国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ関スル件」というGHQの出した指令であるが、国家と宗教の分離と公的教育機関における神道の禁止を強調したもので、国や地方公共団体は神道を支援し

てはならないこと、神道に限らずいかなる宗教も軍国主義国家主義イデオロギーの宣伝弘布をしてはならないこと、神祇院の廃止、公の教育機関での神道教育・儀式の禁止、『国体の本義』『臣民の道』（文部省作成の教材）の禁止、「大東亜戦争」「八紘一宇」等の用語の即刻禁止、公的施設における神棚等の禁止、特定の宗教の儀式に参加しないための差別禁止、官公吏の公的資格における神社参拝の禁止等延々詳細に述べている。前述の彼等が押しつけた憲法案には、表現は変って短くはなっているが神道指令の趣旨は、くまなく盛られている。

抑々ある宗教と政治の結びつきは、その国柄によって自然ときまるものである。彼等の国に在っては、殆んどの兵士がキリスト教徒であるが故に、兵営内に教会が設けられているではないか。キリスト誕生日のクリスマスには、官庁も休みにしているではないか。日本にだけ政教分離を強制するのは、筋が通らぬことは判っていただろうが、恐しいのは「カミカゼ」だった。

玉ぐし料について言えば、憲法第八十九条に〝公金その他の公の財産は、宗教上の組織若しくは団体の使用、便益若しくは維持のため、これを支出し又はその利用に供してはならない〟と彼等は書いた。最高裁の判事になるには勉強もしたであろう。現行憲法制定の経緯くらいは知っていただろう。それなのに麻原彰晃に操られた信者のような判事は、到底常識人とはいえない。

最近になって漸く憲法改正の声が聞こえるようになってはきたが、改正は容易なことではなかろうし、どんなものに変わるのか、まだ想像する段階にもなっていない。そこで国民は、この占領下の憲法で当分我慢しなければならないが、世の中には憲法などの取りきめよりも更に高次元のものがある。それは道義というものだ。戦死したら靖國神社に合祀することは、国が兵士に約束したことではないか。約束を守らずして憲法憲法と称えても、世の秩序は保てない。靖國神社を国が丸抱えするよりも、国民挙って守護した方が、現在の時勢に合っているかも知れぬ。しかし、祭祀だけは約束通り国がやらねばならぬ。御祭神は皆お国の為に死んだのだ。県知事が一回五千円ほどの玉串料を、靖國神社や県護国神社に奉ったからとて、このような騒ぎを起す国になってしまった。、英霊はそれこそ更めて〝ああ残念なり〟と仰っしゃるであろう。

お前もか　最高裁の判事らよ
ああ　英霊に　何と応へむ

B29に体当りして生還した坂本曹長が引掛った大榎

市川　国雄

震天制空隊の坂本曹長は、B29に体当りして空中に放り出され落下傘降下し、東京第一陸軍病院の庭の大榎に引掛り、無事だったという話は聞いている。先般散歩に出て歩いていたら、牛込の国立病院の外柵沿いに大榎があるのを発見、これだなと思い早速カメラに収め、病院の受付に聞いてみたが知る由もない。

坂本曹長は既に故人だそうで確める術はない。往時を知るものはこの大榎だけか。それにしても身を捨てて帝都を守ろうとした特攻烈士のことを、平和ボケした現在の人々に教える方法を考えねばならぬ。

都城特別攻撃隊戦没者慰霊祭

理事長　最上　貞雄

平成9年4月6日（日）宮崎県都城市の旧陸軍基地の一角にある特攻隊戦没者慰霊碑前に於て第21回慰霊祭が厳粛盛大に執り行われた。

ここの処、年々参拝者の数も増加し、今年は五〇〇名に達したのではないかと思われ、若い方々の参拝が増えたようである。

都城市長が奉賛会の会長をされ、諸準備も市の役員の方々が奉仕で、真に有難い次第。戦争を知らない年代の人々で市長も終戦時は中学生であった由、その市長が挨拶の中で「この特攻隊の慰霊祭は、この都城市が存続する限り執り行います。」と申され、歴代市長に申送ることを、参列者一同の前で力強く話された。

都城少飛会の会長少飛17期の中村太吉様は地元の名士で、経営をしておられるホテルで一〇〇名程で直会を開催したが、多忙の中市長は直会の席にまでお出いただき、暫し歓談をされて帰られた。

尚申し遅れましたが、郵政大臣堀内久男氏も参列して下さった。

43回知覧特攻戦没者慰霊祭

理事長　最上　貞雄

恒例の知覧特攻戦没者慰霊祭が5月3日知覧特攻平和観音堂の前で厳粛盛大に執り行われた。知覧町長が特攻慰霊顕彰会会長となり、地元選出県議会議員、知覧町議会議員を始め地元名士も多数参列され、又遺族の方も一四六名余りも参列され、総員では千数百名の方々のお参りがあった。

今年は特に日本に一機しか現存しない4式陸軍戦闘機が平和会館（遺品館）を増築しその中に展示されたことも参拝者が多かった一因であったのではなかろうか。

東京では一寸考えられないことだが、九州に来ると、行政の長が奉賛会の会長となり、慰霊祭を始各種慰霊顕彰事業、特に顕彰施設の建設にまで手を延して居られるのを見聞し、心強い限りで、これでこそ若くして国に殉じられた特攻隊戦没者の国を思う心も末永く国民の間に語り告げられるであろう。

殉国沖縄学徒顕彰五十二年祭

本年も6月23日に靖国神社で、殉国沖縄学徒顕彰会の主催で行われた。既に本誌24号と28号で紹介したので重複することは避ける。

趣意書にいう……中でも胸打って悲きは、童顔溢れる中学校の健児達が仇の迫るを見るや鉄血勤皇隊（14歳から17歳）並びに通信隊（12 13歳）を編成し軍人となり、直ちに凄愴なる戦列に馳せ参ずるや、雄叫を挙げて敵戦車に突入し、敵陣に斬込み或いは通信伝令等の任務に身を挺し、遂にその殆んどが壮烈な最後を遂げ、またひめゆり学徒隊を始めとする女学校の乙女達が、男子に劣らぬ大任を担ひて従軍看護婦（軍属）となり、矢弾降り注ぐ最前線で精神力のあらむ限りを尽して負傷兵の看護に当り、哀れその大半が天翔る身となったことや、更には国策に沿って遠く南九州へ疎開した幼い学童八百が、暗夜の悪石島沖で敵潜の魚雷攻撃を受け、痛ましくも乗船対馬丸と共に水漬く屍となったことであります。（中略）……しかるにこの学徒達の国に殉じた在りし日の尊き姿は、今や学びの庭で教えられることもなく、また太平の世に語られることも少く、心なき戦後も五十二年が過ぎてしまいました……

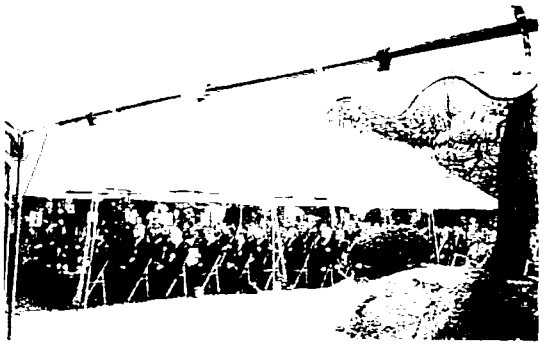
この顕彰行事を主催しているのは、我が協会の顧問でもある国士舘大学教授の金城和彦氏で、祭文を奏上するのいつも若い学徒である。今回は早稲田大学文学部一年の松下文彦氏だった。その一節にいう……私共の世代は、こうした歴史を教えられていないため、散華された方々を、犬死呼ばわりする人さえいます。しかし、当時の沖縄の方々がどのような精神で戦われたかを偲びますとき、そのようなことは絶対に言えません。昨今では尖閣列島をはじめとする領土問題が起きています。諸先輩がどのようなお気持で祖国を防衛されたかを思うと、何としても我が国土は護らねばなりません……

ついて献詠があった

矢弾の中で健気にも　咲いて散りにし若桜
尊き御霊よ安らかに　五色の雲に祈るなり
愛国の至誠烈火の如く童顔の学徒防戦に当る
万折れ矢尽き我事畢る相抱き相撫し遂に玉砕
悲しさのあまり井戸までかけたけれど水汲みし子の足あともなく――ひめゆり
部隊に二人の娘を捧げし母の歌――
砲声天を焦し弾雨降る血河山野阿修羅の如く
学徒挺身死地に赴く嗚呼忠魂万古に薫る

航空碑奉賛同人会
4月18日　市ヶ谷台上

陸軍航空部隊碑　第21回碑前祭



参列者約400人

岩宮会長の捧げた祭文抜粋

本年一月元旦宮内庁が発表された「五十年を顧みて」の天皇陛下の御製には

五十年の国進みこし年月に
いたづきし人の功をしのぶ

と仰せられており、又昨年「終戦記念日に」としてお詠み遊ばされた皇后陛下の御歌には

海陸のいづへを知らず姿なき
あまたのみ霊国護るらむ

とあり、畏くも両陛下が戦後五十年を振り返られて、改めて英霊の皆様の御功績を偲び讃えられ、尚これからも英霊たちがわが国を護り続けてくれるであろうと仰せられております。誠に有難くも恐れ多い大御心であり恐懼感激の極みであります。

この大御心にも拘らず、わが国の現状は如何なるものでありましょうか。国際法違反の不当な東京裁判史観に毒された官民の大多数が、過去の事変戦争をすべて侵略戦争と誤認して近隣諸国に謝罪を繰返し、護国の英霊の皆様の御功績を忘却してみ霊の名誉を冒瀆し続けております現状は、誠に恥かしく嘆かわしき次第でありまして、両陛下の大御心と御英霊の皆様に対し心からお詫び申し上げるものであります。

最近におけるわが国の内憂外患の続発は、正にわが国民に対する当然の天罰警鐘の乱打と申せましょう。このままではわが国は、内にあっては自らの自信を喪失し、外にあっては諸外国の信頼を失い、遠からぬ将来亡国の道を突き進む危機感すら覚えざるを得ません。

私達は一部有識者の憂国真摯な正論に耳を傾け、全国民が真剣公正なる討議を重ねて歴史の真実を認識し、わが日本の正義を確信してこれに誇りを持ち、心から祖国を愛し、事に臨んでは身を挺して国を守る立派な国民となるよう日本を建て直し、更に進んで人・物両面に亘り積極的な国際貢献の実を挙げて世界の国々から信頼され感謝される日本となるよう努力を傾け尽さなければならぬと存じます。

（以下略）

この主碑のうしろに「鎮」「魂」と銘打った円筒形金属製の碑がある。この副碑を建てたのは昭和61年で、当初陸軍航空に属する二〇八〇の部隊名を刻んだが、その後判明した部隊もあり、両碑の間に石板の追碑を建て、現在は三碑合せて二一五九の部隊名を刻んである。それらの中で特攻隊は、比島で散華したもの27個隊、沖縄で散華したもの163個隊、そのほか南方各地7個隊、本土付近（上空を含む）20個隊、満州5個隊、計222個隊の部隊名が刻んであり、そのほか終戦時待機していた部隊も全部刻んである。我々が世を去った後も部隊名だけは、この碑が語り伝えてくれる。

平成九年度特潜碑顕彰祭

真珠湾攻撃の九軍神に始まり、西はマダガスカル、南はシドニーを攻撃、更にソロモン、キスカほか各地に進出し奮戦した特殊潜航艇の関係戦没者、殉職者あわせて四四五柱を祭神とする「嗚呼特殊潜航艇の碑」が広島県安芸郡音戸町波多見の八幡山神社境内にある。本年度の顕彰祭は平成9年5月17日（土）この特潜碑の前で御遺族、来賓を含め百余名が参列して13時30分より厳粛に執行された。

軍艦旗が新緑にひときわ映えるなか、加藤宮司執行のもとに顕彰の祭儀が進み、終わって「同期の桜」を一同斉唱した。特潜会世話人代表の八巻悌次氏より式典終了の謝辞と今後方針の説明があった。八巻氏は特潜第二期の講習員であり、甲標的三〇号艇長としてガダルカナル攻撃に参加しておられる。光輝ある特潜の会を象徴する最も大切な事業と位置づけられるだけあって、終始清々しい雰囲気に包まれていた。

慰霊の対象は特殊潜航艇（甲標的、蛟龍）に搭乗し出撃した戦没者は勿論であるが、各進出基地で陸戦に移行した後の戦死者、また一般潜水艦へ転属後或いは便乗中など他の場所、職域で戦死した特潜関係者も含まれている。なお、水中特攻艇「海龍」関係六四名の戦没者（特攻死はない）、殉職者がすべて包含されており、「回天」の場合は特潜の艇長当時この人間魚雷を創始し戦没した二人のみである。

特潜碑は昭和45年8月に建立され、以後年々顕彰の式典が続けられている。付近にある大浦崎の広島県水産試験場は特潜の訓練地として搭乗員（艇長、艇付）約二六〇〇名を養成した「P基地」、のちの「第一特別基地隊」「第二特攻戦隊大浦突撃隊」の跡地であり、見学して当時を偲ぶことが出来る。

この碑に詣でるには呉駅発倉橋島方面行きのバスで約四〇分、波多見神社下車。タクシーなら呉駅から約二五分。平清盛が切り開いた有名な音戸の瀬戸も途中にあるが、呉市の海上自衛隊潜水艦訓練隊の諸訓練設備および史料室は、事前に申請が要るものの、年間三千人の一般見学者があるという。特潜碑顕彰祭は今後とも毎年5月の第三土曜日に開催されるので、参加の折りはこれらを訪れてみては如何かと思われる。

（評議員　小灘利春　記）

特潜基地跡の碑

特攻基地大浦崎（P基地）

昭和17年10月極秘裡に工場の建設が始められ、翌18年3月創業開始。これが特殊潜航艇（甲標的）製作専門の呉海軍工廠分工場であった。また時を同じうして搭乗員の養成が始められ、受講者は艇長、艇付合わせて約2600名。戦死者は439柱に及んだ。当基地の任務は甲標的の生産、搭乗員の養成、特攻兵器の研究、開発で昭和20年になると甲標的丁型（蛟龍）の完成をみ、一方回天（人間魚雷）も実用段階に達して、来るべき本土決戦に備えたが、同年8月15日終戦をむかえて基地は廃止され、現在では平和な公園、町民いこいの場所となっている。

国民啓蒙の書
「軍事史日録」

戦後に育った日本人の軍事に関する無智は驚くばかり、奉天会戦も日本海海戦も知ぬ、大山巌も東郷平八郎も聞いたこともない名前だでは、愛国心など期待できぬ。戦前は中等学校以上には、現役の配属将校がいて軍事教練は必須課程だった。中等学校に進学しない者も、大半は青年訓練所で軍事教育を受けた。そして兵役は男子国民に果せられた義務である。戦後はそれらが一切消滅したばかりでなく、こと軍事に関しては、歴史はもとより一般常識に拘ることも、嫌悪し避けて通ろうとする誤った風潮がある。

この書物はそのような時弊匡正の為作られたもので明治初年から終戦までの間の我が国の主な戦闘や軍事に関する政治上の事件三一六点を取り上げ一〇行のコラムで解説している。戦後に育った者の軍事常識を涵養するのに最適であるばかりでなく、我々が読んでも既存の知識を整理するのに役立つものである。

著者は菅　実、TEL・FAX〇四九二33一八六四に申込めば郵便払込用紙同封で送ってくれる。頒価送料共千円。